

# 尼門跡の言語生活から見た女房詞の研究 (I)

—— 御所ことばを訪ねて ——

井之口 有一  
堀 井 令以知

## 目 次

### 第1部 (序説) 尼門跡の言語生活と女房詞の文献について はしがき (§1-1) 女房詞とは何か (§1-2)

#### I 尼門跡の言語生活 (§2)

##### 1. 尼門跡と大聖寺門跡について (§3)

###### (1) 尼門跡について (§4)

###### ① 御宮室 ② 御禅室

###### (2) 大聖寺門跡について (§5-1) [付] 宝鏡寺門跡 (§5-2)

##### 2. 尼門跡の言語生活 (§6)

###### (1) 日 課 (§7)

###### (2) 言葉のしつけ (§8)

###### (3) あいさつ言葉 (§9)

###### (4) もじ言葉 (§10)

###### (5) 「お」ことば (§11)

###### (6) 「御所ことば」の保存について (§12)

#### II 女房詞の文献とその解説 (§13)

##### 1. 「蜚藻屑」の女房詞 (§14)

##### 2. 「大上臈御名之事」の「女房ことば」 (§15)

##### 3. 「日葡辞書」所収の女性語 (§16-1) [付]

「ロドリゲス日本文典」の「女子の消息に就いて」 (§16-2) 近衛基熙書写「蜚藻屑」

##### 4. 「女重宝記」の「女ことばづかいの事 付タリ やまと詞」 (§17)

##### 5. 「女中言葉」(正徳本) (§18)

##### 6. 「女 言 葉」(伊藤幸氏写本) (§19)

##### 7. 「女 中 詞」(亀田次郎氏蔵本) (§20)

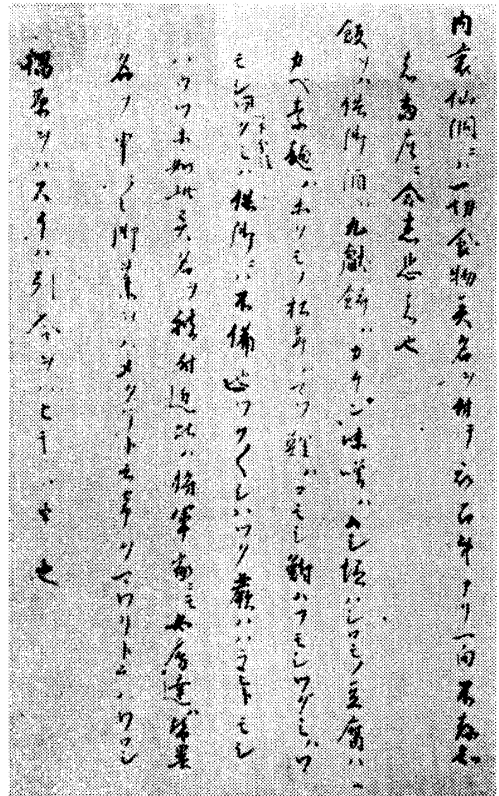
##### 8. 「女今川姫鏡」の「京女郎詞よせ」 (§21)

##### 9. 「草むすび」 (§22)

##### 10. 「女諸礼綾錦」の「大和こと葉」 (§23)

##### 11. 「女万宝操鑑」の「女の物いひつつしみの事 并 女の遣ふ言語の事」 (§24)

##### 12. 新資料「公家言葉集存」 (§25) [付] 「宮廷秘歌」の「秘められた女房ことば」 (§25-3)



## は し が き (§1-1)

この研究は、女房詞(御所ことば)を現に使用している<sup>あま</sup>尼門跡の言語生活の実態を調査研究することによって、従来文献的に研究された女房詞を実態的に究明しようとするものである。

本稿は第1部において、尼門跡の言語生活、および女房詞に関する諸文献とその解説を行い、第2部以下において、その意味論的研究として、女房詞の構造とその変遷の諸相などを究明し、最後に女房詞語彙を集成した「女房詞集」を掲げようとするものである。

**女房詞とは何か**（§1-2） 15世紀初期ごろに、女房（宮中女官）の用い始めたという特殊なことばにもとづく狭義の女房詞は、徳川時代に至って、その女房詞（狭義の女中詞）を継承するとともに、女らしいことばや雅語・歌語などを含めた広義の「女中詞」（大和詞）すなわち婦人語としても、盛んに使用されたが、明治以後一般には衰微した。

かかる広義の女中詞は、女房詞・御所言葉、大和言葉・女中言葉、御所大和詞・御所方の女中詞、お屋敷方のことばなどと呼ばれた。なお、本稿においては、主として狭義の女房詞（狭義の女中詞）を中心として述べることにする。

一方標題として採り上げた「尼門跡」においては、維新以前には皇女・王女、公卿の女などが入室され、狭義の女房詞すなわち御所ことば（比丘尼御所ことば・尼門跡ことば）が早くから永年使用されて現在に及んでいる。（たとえば大聖寺門跡へは応永26年・1419年に皇女が入室）

さて、内裏・仙洞では特殊な女房詞が使用されたことが、室町初期の「蟻藻屑」（<sup>あまのむくず</sup> 応永27年・1420年）（§14）に初めて記された。その宮廷の女房詞が將軍家の大奥でも使用されるようになったことは、同書や足利義政時代の女房詞を記した「大上臈御名之事」（§15）でもうかがわれる。女房詞という術語の最初の文献はこの「大上臈御名之事」の「女房ことば」に始まる。

徳川時代になると、この女房詞が武家の女中や町家の上流婦人に使用されるようになった。それは式亭三馬の「浮世風呂」（文化9年・1812年）に、江戸の武家に奉公する「おさめ」が話す「大和詞」（女房詞）いわゆる「お屋敷ことば」を写した次の文によっても、うかがうことができる。

おさめ「ヲヤヲヤ おしやもじとは杓子の事でございますよヲホ、、、。むす「おさめさん。ほんとにかへ。<sup>わたくし</sup>私<sup>こと</sup>は又おしやべりの事かと思ひました。<sup>すし</sup>餅<sup>さかな</sup>をすもじ。<sup>い</sup>肴<sup>い</sup>をさもじとお云ひだから。おしやべりもおしやもじでよいがネエ。初「いかな<sup>こつ</sup>事でもおまへさんヲホ、、、。おさめ「やがてお屋敷へお上りだ<sup>あが</sup>とわかりますのさ。初「さうさネエ。おしつけ御奉公にお上り遊ばすと。<sup>あそ</sup>夫こそ最う大和詞でお人柄にお<sup>あそ</sup>なり遊ばすだ。……………（三編巻之下、岩波文庫本による）

従来は未詳であったが、この女房詞は、明治維新以前は皇女・王女、公卿の女などが、維新後には旧公家の女などが住持した現在の尼門跡（<sup>維新以前は比丘</sup> 尼御所と称した）にも、今も豊かに使用されていることが判明した。たとえば、目上（<sup>つぎ</sup> お次が御前）には「ごぜん、おそれいりますが、オカチンをアモジで おヒドリあそばして イタダカサレ」（御前、餅を網でお焼き遊ばして下さい）、仲間どうし（お次どうし）では「〇〇さん、オカチンを アモジで ヒドッテ オクレヤスヤ」、目下（御前が一老さん）には「〇〇さん、オカチンを アモジで ヒドッテ オクレ（ヒドリヤッシャとも）」と言いつけている。後述の実態調査は、かかる尼門跡における言語生活を通して、女房詞の実態を考察することを目的とするものである。幸い尼門跡は京都市内に11か寺（<sup>奈良に3か寺</sup> 滋賀に1か寺）あり、調査の便宜が得られた。

女房詞は古来、京都御所に奉仕する女官、殊に御台盤所などに勤める女房が食物等と呼ぶの

に用いた異名に始まる一種の言語法である。つまり普通の名称より、美しく上品に聞えるような婉曲な言い方をしたもので、言語学上・修辞学上いわゆる美化法 (euphemism) の原理に基く異名ともみられる。

菊沢季生氏が言語の位相的立場から、特殊な社会に特殊な言語がみられるのは当然として、宮廷女官の生活にもとづく優美探究によるものとする新しい見解を示され、真下三郎氏も同じ見解に立っておられるものと考えられる。また杉本つとむ氏は地方対都、上下階層の交替の激しかつた室町初期に、貴族たちの一種のけんせい意識も女房詞の発生を促したとの見解を示しておられる。かくして宮廷女官の生活と環境から女性らしい優美性が要求され、かかる女性中心の大奥生活が女房詞発生 of 要因となったのであろう。

現在、女房詞・御所ことばが尼門跡に豊富に残存しているのは、維新前までは、内親王・公卿の女などが住持して特殊なお局的生活をしたことと、維新後も公家出身者が住持して尼僧という戒律を厳守し、閉された生活をしていることなどにもとづくものと思われる。

なお、この研究に対して特に協力と援助を与えられた各尼門跡さん・江馬務教授・池上禎造教授・榎垣実教授・藤森信次郎氏・大塚実忠氏その他関係各位に、心から感謝するものである。

## 第 I 部 (序説) 尼門跡の言語生活と女房詞の文献について

### I 尼門跡の言語生活 (§2)

この項は、筆者が昭和 32 年 1 月以後 9 月まで数回、大聖寺門跡住職<sup>だいしょうじ</sup> (御前<sup>ごぜん</sup> いわの) 石野慈栄さん・宝鏡寺門跡住職<sup>じくん</sup> 花山院慈薫さんなどに面接調査して得たものにもとづいて記述することにする。

#### 1. 尼門跡と大聖寺門跡について (§3)

##### (1) 尼門跡について (§4)

尼門跡は、もと比丘尼御所・黒御所・女王御所とも称し、維新以前、皇女・王女または皇室の猶子である女子の住持する「御宮室」系と、公卿の女または摂政関白家の猶子である女子などの住持する「御禅室」系との 2 種から成立した。寺格的比丘尼御所は足利義満の政策によって成立したものである。

維新後は、比丘尼御所の名称は廃止され、皇女・女王が入室されることはなくなったが、旧比丘尼御所に旧公家の女が住持し、現在、これを尼門跡と称している。本稿でいう尼門跡とはこの意である。次に尼門跡を望月博士の「仏教大辞典」に従い、御宮室と御禅室に分けて、その現住職の氏名・現住所などを示す。

##### ① 御 宮 室

大 聖 寺 門 跡 (旧御寺御所<sup>みてら</sup>) 石 野 慈 栄 (京都市上京区烏丸今出川) (臨濟宗)

宝 鏡 寺 門 跡 (旧百々御所<sup>どど</sup>) 花 山 院 慈 薫 (京都市上京区寺ノ内通堀川東) (臨濟宗)

曇 華 院 門 跡 (旧竹御所) 飛 鳥 井 慈 孝 (京都市右京区嵯峨) (臨濟宗)

光 照 院 門 跡（旧常盤御所） 日 野 西 徳 宝（京都市上京区新町通寺ノ内）（浄土宗）  
 円 照 寺 門 跡（旧山村御所） 山 本 静 山（奈良県添上郡帯解村）（臨濟宗）  
 林 丘 寺 門 跡（旧音羽御所） 唐 橋 慈 正（京都市左京区修学院）（臨濟宗）  
 中 宮 寺 門 跡（旧班鳩<sup>いかるが</sup>御所） 六 条 照 伝（奈良県生駒郡法隆寺村）（真言宗）  
 靈 鑑 寺 門 跡（旧谷御所） 平 賀 祖 心（京都市左京区鹿ヶ谷）（臨濟宗）

このほか大慈院が京都市上京区寺ノ内通堀川東にあったが、宝鏡寺へ合併した。

## ② 御 禅 室

三時知恩寺門跡（旧入江御所） 久 我 信 成（京都市上京区新町通上立売北<sup>宇入江辻子</sup>）（浄土宗）  
 法 華 寺 門 跡（旧氷室御所） 久 我 高 照（奈良市法華寺町）（真言律宗）  
 瑞 龍 寺 門 跡（旧村雲御所） 九 条 日 淨（京都市上京区堀川通堅門前町）（法華宗）  
 慈 受 院 （旧烏丸御所） 片 岡 周 順（京都市上京区新烏丸丸太町北）（臨濟宗）  
 宝 慈 院 （旧千代野御所） 奥 野 法 縁（京都市上京区新町通寺ノ内木下町）（臨濟宗）  
 本 光 院 （旧蔵人御所） 藤 原 盛 善（京都市上京区誓願寺通七本松西）（天台宗）  
 禅 智 院 （旧押戸御所） 平 賀 祖 心（滋賀県高島郡押戸）（臨濟宗）

このほか総持院（旧薄雲御所）が京都市上京区寺ノ内通堀川東入（宝鏡寺西）にあったが、大正8年、慈受院に合併した。

## (2) 大聖寺門跡について (§5-1) 〔付〕宝鏡寺門跡 (§5-2)

この第1部において、主として調査の対象とした大聖寺門跡は、御寺御所・大聖寺<sup>だいしょうじ</sup>歡喜寺<sup>みでら</sup>（大歡喜寺とも）といい、嶽松山と号し、臨濟宗で、由緒寺院の一つである。

大聖寺は、無相定円尼公（日野資名の女、前典侍宣子）の塔所として、將軍足利義満が建立したものである。開基を西園寺実衡の孫、玉巖悟心と寺伝する。応永26年（1419年）、北朝の後円融天皇の皇女が当寺に入室され、いわゆる比丘尼御所となる。後柏原天皇の第一皇女が入室以来、数代天皇の第一皇女が入室され、久しく宮中席次第一であったと言われ、そのため、宮廷に威勢を持ち、徳川初期からは尼衆の触頭となった。

このように大聖寺は後円融天皇の皇女が入室以来、24世光格天皇の皇女・普明浄院玉鑑永潤宮に至る約450年間、法灯はすべて内親王の継承である。

明治維新に至って、皇族御入道のことはなくなって、公家華族の女子に法灯を継がせることになった。それが樋口宣康子爵の女の第25世、樋口慈綱さんである。26世の現門跡・石野慈栄<sup>いわの</sup>さん（石野基通子爵の女・明治20年京都生・満69歳）はそのお弟子である。

尼門跡は常に御所を手本としており、ことばも「御所ことば」を使用していたので、大聖寺に「御所ことば」（女房詞）が長年月間よく保存されたと認められるのも、かかる事情にもとづくものであろう。つまり北朝時代以来維新前まで、この寺では、常に内親王が門跡（「御前」といふ）となり、公卿の女がそれぞれ大上臈・小上臈（以上は高等官相当）として仕え、その下に、一老・二老という判任官相当の尼僧と、その他の下級の尼僧から構成されていた。その当時は奉公人制度のようにして、内親王門跡に奉仕したものである。

なお内親王が住持された大聖寺のような比丘尼御所のことばには、維新以前までは、いわば宮さんことば（狭義の御所ことば）・上臈ことば・お次ことば（前者以外の尼衆ことば）とでもいうべき区別もあったようである。

現大聖寺門跡石野慈栄さんは、明治25年、6歳の時に、当時の門跡・樋口慈綱さんに弟子入りした。前門跡とは半年で死別したが、特にことばづかいのやかましかった樋口門跡に仕えた旧弊な一老<sup>いちろう</sup>がいたので、御所ことばを一老からも教わったし、また宮中とのおつきあいで宮中ことばを覚えるように努めたと現門跡は語っておられる。

なお現在大聖寺では、石野慈栄門跡（69歳、京都出身）はじめ一老さん（明治23年生・66歳、13歳で近江坂本より弟子入り）、二老さん（明治35年生・54歳、京都出身）、三老さん（大正2年生・45歳、京都出身）、その他見習が1人、計5人が静かな生活をしておられる。

〔付〕宝鏡寺門跡について（§5-2）

宝鏡寺門跡は百々<sup>どど</sup>御所といい、西山と号し、臨済宗に属する。開山は北朝の光厳天皇の皇女・恵厳尼公、2世は足利義満の妹、第20世の久厳尼は後水尾天皇の皇女で、それ以後直宮を入室資格として、明治維新に至った。

現門跡花山院慈薫さんは花山院親家侯爵の女（明治43年・46歳、東京生）で、大正3年、5歳のとき、現在の大聖寺門跡石野慈栄さんの下に弟子入りした。禅学・漢学・国文学などについて、各専門家から個人教授を受け、琴・催馬楽・茶道・華道をたしなむ。

昭和25年、宝鏡寺門跡となり現在に至っている。宝鏡寺では、門跡はじめ一老さん（明治25年生・64歳、9歳で大和から先住に弟子入り）、二老さん（明治44年生・43歳、岐阜出身、16歳で先住に弟子入り）の計3人である。

## 2. 尼門跡の言語生活（§6）

### (1) 日 課（§7）

大聖寺門跡や宝鏡寺門跡では、御前は朝5時ごろ起床し（オヒナリ）、口をすすいで（オミウガイをして）のち、仏さんにゴゼン（御飯）・オマワリ（6月なら、オジャガとオナスを煮付けた副食物など）・おつゆ（オムシ一味噌のおつゆにオナスを浮かしたものなど）・おつけもの（オクモジー菜の漬物など）を供え、朝の勤行を1時間半位してのち、8時半～9時ごろに朝食（朝のオパン）をする。その後、歴代門跡およびその父母の祥月<sup>しょうつき</sup>のお勤などをしてから、昼食（ヒルノオパン）をする。午後4時すぎに、朝のお洒水<sup>しやすい</sup>をさげ（放参）、亡者の施餓鬼供養をする。夕食（タ方のオパン）後は、みんな集ってその日のことを話し合ったり、稽古ごとに当て、9時ごろ就寝する（オスマル）。

なお現大聖寺門跡は華道（岳松流家元）・茶道・謡曲などをたしなむ。

また宝鏡寺学園は行事として、月曜日は琴、火曜日は習字、水曜日は百々<sup>どど</sup>流の華道と雅楽、金曜日は茶道、土曜日は茶道（大聖寺で）をそれぞれ教授し、日曜日は時々それらの催物を行う。このように宝鏡寺では、進んで公共事業に奉仕するなど実社会との交渉がよく行われている。

### (2) 大聖寺門跡の「言葉のしつけ」（§8）

① 御前<sup>ごぜん</sup>石野慈栄さんが幼少の頃は、一老・二老の老僧が二人いて、言葉のしつけが他の尼門跡よりやかましく、「……いたします」というべきところを「いた」や「ます」を抜かしていうと、そらまた「いた」「ます」が抜けたと戒められ、ゲラゲラ笑いやクスクス笑いを人の前でするものでないといって叱られたそうである。「ありがとう」を昔は「おかんたい」（お歓待）と、今では「かたじけのう」というのがこの寺の習慣で、京都方言の「おおきに」はここでは使用しない。「失礼致します」という意味で「おゆるし遊ばせ」といい、目下には、今では「こうしといて くれやす」といってもよいが、昔は「こうしといて たもや」といった。

② お次の一老さん（明治23年生）も13歳の時から、今の門跡に仕え、目上の人には「こう あそばせ」、朝夕には、御前に「ごきげんよう」と、仲間の尼僧間では「お早う」「お休みやす」ということを教えられ、人のものにはお茶碗・皿と「お」をつけるが、自分のものには「茶碗」「皿」と「お」をつけないこの寺のいい方に、はじめのころは慣れ難かった。里の方（滋賀県坂本）では、自分のものにも「お」をつけたのに、こちらでは、茶碗・皿と呼び捨てにするのはきまりが悪かった。それで、はじめの間は人目に立たぬように小さい声でそういったそうである。このように、この寺では自分のものには「お」をつけず、人のものにだけ「お」をつける。

③ また一人称代名詞には「わたくし」（目上に）と「わたし」（同輩・目下に）とを使い分け、「わたくしはこう致しまして」（お次が御前に）、「わたしがな」（御前がお次に）などと使う。

また二人称には、あなた（目上・同輩に）、あんた（同輩に）、おまえ（目下に）を使い、「御前どう遊ばしましたか」（お次が御前に）、「おまえな」（御前がお次に）などという。

④ 目上・同輩・目下に対し、それぞれ、ことばを使い分けることがやかましく、次のようにいう。

(イ)（目上に、一老さんが御前に「お起きくださいませ」というとき）ゴゼン、オヒナッテ イタダカサレ（またオヒナリマセ）。

(ロ)（同輩どうしで、二老さんが一老さんに「お起きください」というとき）要邦サン（名をいう）、起キテ オクレヤスヤ。

(ハ)（目下に、御前が一老さんに、「お起きなさい」というとき）要邦サン（昔は呼びすてに要邦）、オ起キヤッシャ。

### (3) 大聖寺門跡の「あいさつ言葉」 (§9)

① 朝、起きたとき、お次<sup>ごぜん</sup>が御前に「ごきげんよう」とあいさつすると、御前は「はい、おはよう」という。お次<sup>ごぜん</sup>どうしなら、普通に「おはようございます」でよい。目上には、朝・昼・晩のあいさつや訪問・帰宅の際何れも「ごきげんよう」という。なお、お上<sup>かみ</sup>に対しては「おそれながら ごきげんよう（ごきげんさんよう）」という。

② 御前<sup>ごぜん</sup>がよその尼門跡を訪問する場合のあいさつとしては、例えば、時候のあいさつからはじめて、「厳しい寒さでございます。ごぶさたを申しましてな……ごめんどうさん、おじやまさんを致しまして」などの口上をいう。帰宅のときには、「こんにちはご面倒さんを申しまして、お心いれのごちそうをいただきまして有難う。」といい、先方は「ようこそ、おひさび

さで……」などという。随伴のお次は先方の御前に「こんにちは、突然ごめんどうさんを遊ばしまして、わたくしまでご同様いろいろ恐れいます。……どうぞ、またおひまがアラシャイマシトラ、おいて遊ばしていただきとうございます。ゴキゲンヨー。」などとあいさつする。

③ 先方の御前に不幸があった時には、御前は「このたびはおいたいたしいおことでございます。」と悔みを述べる。一老さんの不幸に際して、お次は「このたびは存じよりませず……一老さんにはお世話さんになりましたことでございます。みなさんにはご愁傷のおことでございましょう。ちょっとお悔みに伺いましたことでございます。」と弔問のあいさつをする。

④ 法要などの終った後には、一老・二老一同で御前に「こんにちは、おとどこおりのうお済み遊ばしまして。」とあいさつすると、御前は「きょうは、みなご苦労さん。」などと答えることになっている。

なお、あいさつというほどではないが、御前がお次に給仕をたのむとき、「おはいぜんにおいでや。」という。ごはんを頂くことを「オパンを いただく。」というが、お次は御前に「きょうは いろいろ 出来ましたな。御前も いろいろ およろこびで ございます。御前、どうでございます。きょうの おかげんは。」などという。

#### (4) もじ言葉 (§10)

もじ言葉は、たもじ(たこ)・おもじ(帯)のように「何もじ」とつく語詞で、女房詞独特の語構成の一つということができる。いわゆるもじ言葉の数は一定していないが、およそ90語ぐらいが昔からあったのではないかとされている(真下三郎氏「婦人語の研究」90頁)。

今、もじのつく語を大聖寺・宝鏡寺の両門跡について面接調査した結果を示すと、次のようである。

なお (§10)・ (§11) に示す例語の表記は、当該文献のかなづかいによった。

① 「大上藤御名之事」 (§15-2) のもじ言葉10語中、宝鏡寺門跡で、現在そのまま使用する語としては、さもじ(さば)・たもじ(たこ)・いもじ(いか)・くもじ(くき・くきの漬物)の4語がある。ただし、このうち、魚類に関する語はいずれも理解語として残っている(寺ではナマグサは食べないから)。また、あをい(そば)は今では「そもじ」という。

少し言いかえて使用する語に、おすもじ〔すもじ〕(すし)があり、現在使用しない語として、こんもじ(葱そ)・こもじ(鯉)・ふたもじ(にら)・ひともじ(き)・にもじ(にんにく)の5語がある。

② 「女重宝記」 (§17-6) 所掲の10語について、大聖寺門跡に残存の語は、しゃもじ(しゃくし)・いもじ(いか)・たもじ(たこ)・くもじ(くき)・のもじ(糊、食べる海苔は「のり」という)・ゑもじ(ゑび)の6語(ただし魚類は理解語としてである)。使用しない語に、ゆもじ(ゆぐ)〔したのものという〕・ねもじのはし(白はし)・おもじ(おび、自分のは「おび」、お上のは「おみおび」という)の3語、使用状態未詳の語として、すもじ(すず)がある(「すもじ」は鯨のことを今ではいう)。

なお大聖寺門跡は、もじ言葉について、この「もじ」の語源はよく分らぬが、「えび」とい

うより「えもじ」といった方が柔らかく聞えるので、使用しているのだといっている。

(5) 「お」ことば (§11)

いわゆる「お」ことばについて、大聖寺門跡は次のようにいう。「このお寺は維新前まで宮さんがナラシャッタ（いらっしやった）ので、お上方さん<sup>かみがた</sup>に対しては「お玄関」・「お台所」と「お」をつけることが多く、自分の身につけるものは「おび」「たび」といい、「お」をつけてはいけない。京都の町方の人がよくいうように、「おみあわせ」「おひとえ」などと、自分のものに対しては、この寺では絶対にいわず、「あわせ」「ひとえ」と「お」をつけない。

文献所掲の女房詞「お」の残存状態を面接の上、調べたところでは、次のようである。

① 「蟹藻屑」 (§14-2) について、大聖寺門跡と宝鏡寺門跡では、かちん（餅）・むし（味噌）・かべ（豆腐）のような語は常に「お」をつけて、おかちん・おむし・おかべという。また文献では酒は九献とあるが、門跡では普通には、「おっこん」という。更に「御菜ヲハメクリト云常ニヲマワリト云ハワロシ」とあるが、今日では「おまわり」とだけいう。

② 「大上臈御名之事」 (§15-2) について、宝鏡寺でもそのまま使用する「お」ことばは、御まはり（さい）・御まな（うほ）・おひら（たひ）・おかか（かつほ）・おいた（かまぼこ）・おいも（いも）・おゆ（ゆ）・御はぐろ（つくるかね）である。

また「皆此たぐひ御もじをそへていふよし」として挙げている13語の中、今でも「お」をつけて使用しているものは、「おかたな・おたたみ・おまめ・おふで・おすずり・おじゅず・おすみ・おうちは<sup>う</sup>・おはんぞう・おかゆ」である。「らっそく」は「おろうそく」（「おろう」とも）という。（「らっそく・むしろ」には「お」を付けない。）

また文献では「お」をつけてないが、「お」をつけていう語も多い。その例として、おすもじ〔すもじ〕（すし）・おむら〔むらさき〕・おくちぼそ〔くちぼそ〕（かます）・おかちん〔かちん〕（もちい）・おっこん〔くこん〕（さけ）・おはびろ〔はびろ〕（ちしゃ）・おかべ〔かべ〕（たうふ）・おむし〔むし〕（みそ）・おなす〔なす〕（なすび）・おまん〔まん〕（まんぢう）・おあいもん〔あひ〕（あひの物）がある。

また、文献を少しいかえて使用し、「お」をつける語には、おなか（今日では綿の意）・おつゆ（しる）・おしょうじん（しょうじん）・おひやし（今では、冷しておいた水の意）・おきじ（きじ）・おいたもの〔おいたみ〕（しほ）・おあへ<sup>え</sup>（あへもの）・つめたおつゆ（ひやしる）・おみそいり（ぞうすい）・お重（重箱）・おたから（ぜに）がある。文献では「お」をつけていうと記載してある語の中、「おたたみ」は御殿や御所のをいい、自分のには「たたみ」といって「お」をつけない。「まめ」を「おまめさん」というのは町方の人<sup>♪</sup>の言で、ここでは使わない。

このほか、文献所掲の「お」ことばで、現在は使用しない語には、御だいぐご（いひ）・おなか（いひ）・御しる（しる）・御さかな（さかな）・おなま（なます）・おはま（はまぐり）・御あし（ぜに）・おみそう（ぞうすい）がある。

(3) 女重宝記の「お」ことばについて

(4) 同書「女ことばづかひの事」 (§17-5) 所掲の「お」ことば中、宝鏡寺門跡で今も使用し



ている語には、次の語がある。おひろい（ありく）・御手<sup>おて</sup>がつく（物よくまいる）・おみや（みやげ）・おみあし（あし）（自分のは「すそ」という）・おぬる（熱<sup>あつ</sup>さしたる）、また、ごはん一ぱいを「おひとつ」・大小便にゆくを「おとうにゆく」。

少し言いかえて使用する語として、むつかる（なく）〔おむつかるとはいわなくなった〕おいしい（むまい）〔「いしい」とはいわぬ〕。また「うを」を「とと」といわず、「おなま」といい、「気のわるき」を「御きげんあしき」といわずに「おきにさわる」という。

(4) 同書「大和言葉」 (§ 17-6) で、大聖寺門跡に残存する「お」ことばとしては、御<sup>お</sup>なか（わた）・おいろ（べに）・おちや（入みそ）・おしたじ（しやうゆ）・おはびろ（ちさ）・おは（な）がある。

少し言いかえて使用する語には、おむし（みそ）・おっこん（酒）・おまん（まんじゅう）・おかちん（かちん）・まめのおかちん（まめのこもち）・おむすび（やき食）・おかべ（たうふ）・おでん（でんがく）・おゆのした（ゆのこ）・おたから（ぜに）がある。

使用されなくなった語には、おさっし（はな紙）・おひや（水）〔今ではおみずという〕・おさがり（雨ふる）・おかべのから（きらず）〔うのはなという〕・おひら（鰯）・おぼそ（鰯）・おさぐり（くじら）・おはし（ぜに）があり、使用状態未詳の語として、おさきたたれ（さはし柿）がある。

なお、「さん」「さま」については、相手を「さん」と呼ぶか、「さま」というかの間に付いて、共通語では「さん」というより「さま」の方が丁寧であるが、御所ことばは「さま」を使わず、「皇后さん」「宮さん」「〇〇さん」という方が丁寧であると大聖寺門跡は答えた。

#### (6) 「御所ことば」の保存について (§ 12)

大聖寺門跡石野さんの見解は、次のようである。「時勢が変ると、わたしが子供のとき叱られたことを申しても、今の人には通じないし、昔の御所ことばばかり使っていても分らぬ人が多いので、そればかり使おうとは思わんが、やっぱり、こういう言葉はせめてこの寺でなりと保存しておきたい。わたしは御所ことばを尼門跡や宮中とのお付き合い、旧公家にはもちろん、他所の人（言語圏を異にする人）にも使っている。今の女学生のことはぞんざいで、せめてもう少しきれいなことばを使ってほしい。」とのことである。

さらに宝鏡寺門跡花山院慈薫さんは、この点について次のように語った。「わたしも小さいときからいろんな言葉を使って叱られましたので、叱られるのはかなわんと思いました。しかし、年がいくと、御所ことばを残しておきたいし、是非このお寺だけぐらいには残したいと思います。わたしぐらいの年ですと、相手のことばに応じたものいいをしますが、寺でお茶を教えているので『……あそばせ』ではあまり隔りを感じますので、そのときは、親しみやすくするために、現代風のことばづかいをしています。しかし尼門跡で、公式のときだけは御所ことばを残したいのですが、それがなかなか……」ということであった。

また、女房詞は尼門跡の仲間だけで使うのか、という質問に対しては、大聖寺門跡は、「仲間でもあまり使わぬ人もあるが、幼少から寺に入った者は、やはり尼門跡仲間ではもちろん御所ことばを使うし、わたしなどは一般の人に対しても御所ことばを使う。」と答えられた。さらに、宮中ことばはこの尼門跡ことばとほとんど同じであるとも語られた。

なお尼門跡ことばは内裏・仙洞御所ことばの直系であるが、これと宮中ことばとの比較については今後の調査に待つことにする。

また、御所ことばの長所について、宝鏡寺門跡は発声の柔らかさに美点を認め、大聖寺門跡も来客のときに「ようこそ いらっしゃいました。」というよりは「どうぞ ごゆるりと。」という柔らかく、きれいに聞える。こうした点が御所ことばの長所だと言っておられる。

また、次のような忌詞が、大聖寺に残っていることを付け加えたい。今はいわぬが、昔正月三か日は「ねずみ」というと、「ねずみ」が大暴れするといふので、「かのひと」といいかえ、また夜分「天狗」というと、火に祟るといふので、「ものものさん」といい、もしも天狗という語を間違えて使うと、「水・水・水」と三べん唱えたという。

以上の調査によって、従来、国語学の研究対象とされたことがない尼門跡の言語生活の一端が明らかにされた。ここに文献資料のみによる女房詞研究にはみられない新しい角度からの女房詞研究、たとえば語彙的にはもちろん敬語法についても、若干の新しい道が開かれることになったといえよう。一般に言語生活の種々相を国語史との連関においてどのように取扱うかは、今後の国語学の重要な課題となっているが、女房詞の文献資料を尼門跡の言語生活と、どのように関係させて説くかは、意味深いものと思われる。これらについて、筆者は第2部(本論)において述べたいと思う。

さらに尼門跡という特殊な社会に保存された女房詞による言語生活が、都会人の言語生活といかにかかはなれたものであるか、またそこで生活する尼僧たち(御前、一老・二老)が、特殊な女房詞(御前ことば・お次ことば)をどの程度に用いているか、また将来、おそらくは漸減していく女房詞を後継の尼門跡たちがどのような形で保存していくであろうか、それらはここに示した若干例からも、ほぼ想像することができであろう。

## Ⅱ 女房詞の文献とその解説 (§13)

女房詞関係文献は多数にのぼるが、ここでは、その代表的なものについて、年代順に文献の解説を試み、そのうち必要と思われるものには、特に文献の本文を載せた。

女房詞関係文献には、語彙集的なものに、「蜚藻屑」(応永27年・1420年)(§14-2)、「大上臈御名之事」所収の「女房ことば」(室町初期)(§15)をはじめ、書写本の「女中言葉」(正徳2年・1712年)(§18)・女言葉(享保7年・1722年)(§19)・女中詞(享保ごろか)(§20)や昭和になってからの「公家言葉集存」(草案)(昭和19年・1944年)(§25)、その他「日葡辞書」(慶長8年・1603年刊)(§16-1)や「隠語辞典」(昭和30年・1955年刊)などがある。

また、当時の婦人教養書的なものには、「女重宝記」(元禄5年・1692年刊)所収の「女ことばづかひの事 付ッやまと詞」(§17)をはじめ、「女今川姫鏡」(宝暦13年・1765年刊)所収の「京女郎詞よせ」(§21)「女諸礼綾錦」(寛政8年・1796年刊)の「大和こと葉」(§23)、「女万宝操鑑」(寛政13年・1801年刊)の「大和詞」(§24)などがある。

その他、ここでは解説しないが、「女教文章鑑」(寛保2年・1742年刊)・「女寺子調法記」(女

化3年・1806年刊)・「婦人手紙之文言」(文政3年・1820年刊)などの「女中言葉遣」とか、「女文林宝袋」(元文3年・1738年刊)・「女千載和訓文」(宝暦9年・1759年刊)の「女言葉遣」とか、「女今川錦の子宝」(元文2年・1837年刊)の「女言葉よしあし」などがあり、この他にも、実用書簡書所収のものがある。

女房詞の批判的研究としては、田安宗武の「草むすび」(§22)、菊沢季生氏・三宅武郎氏・真下三郎氏・杉本つとむ氏などの研究があり、本稿はこれらに負うところが多い。

なお文献解説中に示した例語のかなづかいは原文のものによった。

## 1. 「<sup>あまの も くず</sup>蟹藻屑」の女房詞 (§14)

### (A) 解 説 (§14-1)

「蟹藻屑」(3巻)は恵命院権僧正宣守、応永27年(1420年5月23日)の選述で、鎌倉中期以後室町初期に至る僧俗の故実を記したものである。

その中で、いわゆる女房詞について簡明に述べてあり、女房詞文献中の最古のものとして、もっとも注目すべき文献と思われる。§14-2にあげた「蟹藻屑」は陽明文庫所蔵の近衛基熙<sup>もとひろ</sup>(関白太政大臣、享保7年・1722年没)筆の写本「蟹藻屑」によった。(これを冒頭に写真として掲げた)。陽明文庫本は群書類従巻492の「海人藻芥」と一部字句を異にするので、その点を文献所掲のところ (§14-2)で注記した。

著者の恵命院権僧正宣守は、京都の<sup>おむろ</sup>御室御所仁和寺の院家である恵命院の弟子筋に当る。

本文は前段で、「内裏仙洞＝ハ一切食物異名ヲ付テ被召事アリ 一向不存知者当座＝令迷惑者也」と記してある。これは、次項の「大上臈御名之事」の「女房ことば」が、足利將軍家の大奥のものを記したものであるのに対して、内裏仙洞における食物の異名を記したものである。その異名による隠語的性格から、当時その異名を知らない人は当座迷惑したことなどが解る。

次に本文は、「飯ヲハ供御 酒ハ九献……」以下14の飲食物に関する具体例を掲げ、つづいて「近比ハ將軍家＝モ女房達ハ皆異名ヲ申ス云々」とし、宮中で始まった女房詞がすでに当時(室町初期)、足利將軍家の女房達にも伝播使用されていたことを記している。

さらに「御菜ヲハメクリト云 常＝ヲマワリト云ハワロシ」と記して、日常語として「ヲマワリ」といっているのを退ける言語規範意識を明瞭に示し、最後に、「相原ヲハスイハ 引合ヲハヒキト申也」として、紙の異名2例を掲げている。

このように、本文には女房詞18語を所収し、その内訳は、狭義の食物9、野菜4、魚類2(コモジ・フモジ)、鳥類1(ツモジ)、紙の名2(スイバ・ヒキ)となっている。

「蟹藻屑」所掲の女房詞の語構成は、次のようである。

① 異形(原形と異った語形)に接頭語「お」をつけるものに、ヲマワリ(御菜)の1語(ただし本書のメグリ〔御菜〕が、群書類従本ではヲメグリとなっている。)

なお女房詞の一特徴であるこの「お」ことばは、蟹藻屑では一語に過ぎないが、「大上臈御名之事」では、32語の多数をあげている。これは丁寧なことばづかいをする意図の現れである。

② 接尾語「もじ」・「もの」をつけるもの〔5語〕

(イ) 「もじ」をつけるものはコモジ (鯉)・フモジ (鮒)・ツモジ (ツグミ) の3語。

なお女房詞をもじ言葉ともいうほどであるが、「大上臈御名之事」では10語をあげ、女重宝記では「女の詞は片言まじりにやはらか成もよけれ……万の詞におともじとを付やはらか成べし」とも教えている。

このもじをつける語詞は、婉曲表現としての女房詞の特色を示すものである。

(ロ) 「もの」をつけるものは、シロモノ (塩)・ホソモノ (索麵) の2語

③ 語幹の後部を省約するものに、マツ (松茸)・ツク (ツクヅクシ)・ワラ (蕨)・ヒキ (引合) の4語があり、これも婉曲表現の一種とみられる。

④ 性質による命名に、ホソモノ (索麵)・シロモノ (塩)・ウツホ (ヒトモジ)・カベ (豆腐) などがある。これは奇麗で上品な表現のために、そのものの性状をとり、特徴をとらえたものと思われる。

なおこれとは別に、漢語・男性語・流行語を避けるのも女房詞の特色である。

(B) 陽明文庫本「蜚藻屑」 (§ 14-2)

内裏仙洞ニハ一切食物異名ヲ付テ被召事<sup>也</sup>アリ 一向不存知者当座<sup>迷惑スベキ者哉</sup>ニ令迷惑者也

飯<sup>ヲ</sup>供御 酒ハ九献 餅ハカチン 味噌<sup>ヲ</sup>ハムシ 塩ハシロモノ 豆腐ハカベ 索麵ハホソモノ  
松茸ハマツ 鯉ハコモシ 鮒ハフモシ ツグミハツモシ「ツクミ<sup>以下分注ヲ</sup>ハ供御ニハ不備也」ツクヘシ  
ハツク 蕨<sup>ワ</sup>ハハラ ヒトモシ<sup>蕨</sup>ハウツホ 如此異名ヲ被付 近比ハ將軍家ニモ女房達ハ皆異名ヲ中  
云々 御菜ヲハメクリト云 常ニヲマワリト云ハワロシ

相原ヲハスイハ 引合ヲハヒキト申也

2. 「大上臈御名之事」の「女房ことば」 (§ 15)

(A) 解説 (§ 15-1)

「大上臈御名之事」(一卷)は著者・著作年代の明記はないが、「慈照院殿御代」(慈照院は足利義政の諡号)すなわち足利義政(1435~1490)時代の大上臈の名・深曾木・化粧・服飾・おさな名・女房詞等を記したものである。

群書類従巻414所収の「女房ことば」には、足利義政時代の將軍家大奥の女房詞約126語を掲げてある。

本書は將軍家の女房詞を記した最初の文献であり、記載も約126語の多数に上る点において、内裏・仙洞の女房詞を簡明に記した「蜚藻屑」(18語)とともに室町期における重要文献である。

本書や「蜚藻屑」には、それ以後の「女重宝記」(1692年)系・「女中言葉」(1712年)系などに見られる雅語・歌語や一般婦人語の混入が見られない点をも注目すべきである。

さらに「一らつそく、むしろ、かたな、たゝみ、まめ、ふで、すゞり、しゆす、すみ、あふぎ、うちは、はんぞう、かゆ、皆此たぐひ御もじをそへていふよし。」と記して、「お」のつく

ことばをはじめて類型化して記した点も注目される。

所收語彙のほとんどは飲食物関係の語であるが、その内訳は、狭義の飲食物95, 家具調度28, 鳥類3〔しろおとり(きじ)・がん(がん)・くろおとり(がん)], その他1〔さしあひ(ふじやうになる事)〕である。

次に新校群書類従巻414「大上藤御名之事」によって、その女房ことばを掲げる。(ただし、<sup>※お</sup>「一あぶら ぁとのあぶらといふ。」だけは、行書体群書類従に「おとのあぶら」とある「お」を筆者が注記したもの。なお語順は、いひ・しる・さい……の順。)

(B) 大上藤御名之事 女房ことば (§15-2)  
所 収

一い ひ 御だいぐご、おなか	一さけ魚ノ名 あかおなま	一き ひともじ
だいにには、いひにかぎらず	一か ま す くちぼそ	一あ づ き あかとも、あか〱
そなふるものをくごといふ。	一す る め よこがみ、する〱	共。
一し る 御しる、しるのした	とも。	一にんにく にもじ
りのみそを、かうの	一このわた こうばい	一い も おいも、まもとも。
水といふ。	一た ら ゆき	一こんにやく にやくとも
一さ い 御まはり	一か ざ め かざ	一まんぢう まん
一さ か な こんとも御さかなと	一た こ たもじ	一かうの物 かうのふり
も	一かまぼこ おいた	一ご ば う ごん
一う (を) ほ 御まな	一水 おひやし、井のなか	一わ ら び わら
一しやうじん 御しやうじ物	共。	一まつたけ まつ
一が ん くろおとり、またが	一はまぐり おはま	一竹 の こ たけ
んとも。	一い か いもじ	一あさづけ あさ〱
一た ひ おひら	一き じ しろおとり	一つく〱し つく
一やきもの うき〱	一も ち い かちん	一さうめん ぞろ
一ゑ そ こんもじ、しらなみ	一さ 酒 け くこん	一まめなつとう いと
とも。	一ちしや。 はびろ	一ほしわらび くろとり
一こ い こもじ	一ちやう。 くもじ	一き ね なかぼそ
一ゑ び かゞみ物	一そ ば あをい	一う す つく〱
一す し すもじ	一た う ふ しろ物とも、かべと	一ゆ おゆ
一か つ ほ おかつ、から〱共	も。	一ぜ に 御あし、ゆくゑとも
一な ま こ はなだ	一し ほ おいたみ、しろ物と	一あ ぶ ら <sup>※お</sup> ぁとのあぶらといふ
一い り こ くろ物	も。	一きりむぎ <sup>※ぎ</sup> きりぞろ
一な ま す おなま、つめた物と	一ゆ の す くさ御す	一あへもの みそ〱
も。	一からのこ てうづのこ	一じゆくし じゆく
一な べ くろもの	一やきしほ やきおいた	一ひやしる つめたおしる
一か な わ 三あし	一み そ むし	一ぞうすい おみそう
一ふ な やまぶき	一すりぬか わりふね	一ち ま き まき
一は も ながいおなま	一な す び なす	一そばのかゆ うすずみ
一か れ い ひらめ、かためとも	一くゝだち くゝ	一ひやむぎ つめたいぞろ
一い は し むらさき、おほそと	一な あを物	一つくるかね 御はぐる
もきぬかつぎ共。	一さ ゝ げ さゝ	一てんもく ちやわん
一からさけ から〱	一大 こ ん から物	一らつそく、むしろ、かたな、た
一さ ば さもじ	一に ら ふたもじ	ゝみ、まめ、ふで、すゞり、し

ゆす、すみ、あふぎ、うちは、	一大ぢうおなじ	一あひの物 あひ
はんぞう、かゆ、皆此たぐひ御	一こぢうおなじ	一つゐがさねは、そうみやうなり。
もじをそへていふよし。	一七どいり 七ど 五度いり 五	くぎやう、四はうは つねの人
一ふじやうになる事 さしあひ共	ど	はもちゐず。けんしやうを四方
云	一三度いり 三ど	にあけたるをいふ也。

### 3. 「日 葡 辞 書」所収の女性語 (§ 16-1)

1603年(慶長8年)に本編が、翌年に補遺が長崎学林から出版された。イエズス会宣教師数名が共編した。当時の標準語のほか方言・歌語・卑語・女性語など32,800語を含み、語義のほか用法をも注記した室町時代語の研究には貴重な資料である。ここに挙げた女房詞資料はパジェスの仏訳本(Léon Pagés: Dictionnaire Japonais-Français 1868. Paris)によって筆者が訳出した。(※印は原典補遺に記載の分である。)例語にみられるように、Parole féminine 女性語, expression féminine 女性的表現, parole des femmes 女性の言, mot féminin 女性的語, Parole dont se servent ordinairement les femmes 普通女が使う言, のような注記のある語をすべて採った。これらの注の術語には、大した意味の差はないものと思われる。また「お」のついたことばにすべて「女性語」の注がある。ヨロコブの項には、パジェスの補記があり、Cami(上)とあるのは京都のこと(下は長崎)である。女房詞資料としての本書の価値は十分認識されなくてはならない。次に示す配列は五十音順にした。なお「方言」第3巻5号に近藤国臣氏の紹介がある。

- \* \* \*
- ア カ Aca, c.-à-d すなわち Azzouki, アヅキ. Espèce de petits haricots. 小さい豆の一種。  
(Peut-être おそらく le *Rottlera Japonica* Sprengel-Hoffmann.) (Parole féminine 女性語)
- \* アカヲマナ Acawomana, Saumon, poisson 鮭. 魚. (parole féminine 女性語)
- \* ア モ Amo, Boulettes de farine de riz 餅, 米の粉のだんご (parole des femmes et des enfants 女と子供の言)
- イド, ライド Woido, expression féminine pour désigner la partie postérieure du corps, en parlant avec respect. 敬意を以て話すとき, 尻を示すための女性的表現。
- ウチマキ Outchimaki, Riz. 米 Parole féminine 女性語。
- ウ ツ ラ Outsouwo, Ciboules, oignons 葱, 玉葱 Parole féminine 女性語。
- \* カ ウ Cō, c.-à-d すなわち Miso, ミソ (Parole féminine 女性語)
- \* カエリコト Cayericoto, Réponse par lettre 返信 (Parole féminine 女性語)
- \* カ 、 Caca, c.-à-d. すなわち Catsouwo, カツヲ Nom d'un poisson 魚の名(parole féminine 女性語)
- カ チ ン Catchin, (Motchi モチ), Boulettes de riz 餅 (parole féminine 女性語)
- カ ブ Cabou. Pied ou souche de l'arbre, du bambou, etc., qui demeure après que la tige est coupée. 茎が切られて後に残る木または竹の根元又は株 || Racine du navet, ou navet 蕪 (の根) または蕪 parole féminine 女性語), mieux もっとよくいうと *Caboura*.
- \* カ ベ Cabe, c.-à-d. すなわち Tōfou, タウフ, Epsèce de fromage qui se fait avec des haricots pulvérisés 粉末にした豆で作られるチーズの一種 (parole féminine 女性語)
- \* カ ラ コ Coraco, son pour laver les mains 手を洗うための糠 (parole féminine 女性語)
- \* カ ラ モ ン Coramon, Radis 二十日大根 (parole féminine 女性語)

- キヤモジナ Kiamojina, ou または *Kiacha*, キヤシヤ Chose propre, nette, polie, pure, et agréable à voir. きれいな, 清潔な, 磨かれ, また見て気持ちのよいこと。parole féminine 女性語。
- \* キ リ Kiri, Réchaud en bois, revêtu intérieurement d'argile, et fermé dans lequel les Japonais mettent du feu pour se chauffer les pieds en hiver 内部を粘土で被い, 閉じた木の焔炉で, その中に日本人は冬, 足を暖めるために火を入れる chaufferette 足こたつ, Parole féminine 女性語。
- \* キリゾロ Kirizoro, c.-à-d. すなわち Kirimoughi, キリムギ Espèce de vermicelle, そうめんの一種。Parole féminine 女性語。
- \* ギ ン シ Ghinchi, ¶ Vermicelle そうめん (parole féminine 女性語)
- グ ゴ Gougo, c.-à-d. すなわち *Mechi* メシ, riz cuit 飯 (expression féminine 女性的表現)
- ク コ ン Coucon, vin 酒 (expression féminine 女性的表現)
- \* クチボソ Coutchiboso, c.-à-d. すなわち *Camasu*, カマス nom d'un poisson 魚の名 expression féminine 女性的表現。
- \* ク モ ジ Coumoji, barbes ou racines de raves ou de navets, confits dans la saumure. 漬物用の塩水の中につけた蕪またはかぶらのひげ状のものまたは根 (parole féminine 女性語)
- \* クロモノ Couromono, marmite 鍋 (expression féminine 女性的表現)
- ゲ 、 Gheghe, c.-à-d. *Jöri* ジャウリ, Chaussure comme des sandales de paille 藁のサンダルのような履物, 草履 (expression féminine 女性的表現) Gheghewo sourou ゲ、ヲスル, chausser de ces sandales de paille 草履を履く。
- コ ウ カ Côca. (*Chiriyeno tana* シリエノタナ, c.-à-d. すなわち *Chôbenjo*. ショウベンジョ), cabinets pour les moindres nécessités 小便所 (Expression féminine 女性的表現)
- \* コナカケ Conacake, bouillon de riz, d'herbe, etc., ou autre mets mélangé 米・菜等のブイヨン, または他の混合食品。
- \* コ モ ジ Comoji, froment 小麦 (parole féminine 女性語)
- サ 、 Sasa, c.-à-d. すなわち *Sake* サケ Vin 酒 Parole féminine 女性語。
- サ、デン Sasadgin, c.-à-d. すなわち *Noucamiso*, スカミソ, *Miso* fait avec le son du riz. 糠でつくったみそ (ぬかみそ) Parole féminine 女性語。
- \* サ、ノミ Sasanomi, c.-à-d. すなわち *Sakeno cozou* サケノカズ, Résidu qui demeure après que le vin est exprimé. 酒がしぼられた後に残る残滓。Parole féminine. 女性語。
- シ 、 Chichi, Urine des enfants 子供の小便 (parole féminine 女性語), *Chichiwo sourou*, シ、ヲスル, Uriner 小便する (les enfants 子供たち) faire pipi おしっこする (bas 卑語)
- シ ヲ Chiji, membre viril d'un enfant 子供の陰莖, (parole féminine 女性語)
- \* シ タ チ Chitadgi, Froment 小麦, (しょうゆか?) (Parole féminine 女性語)
- シロモノ Chiromono, sel 塩 ((Parole féminine 女性語)
- ス マ ス Soumachi, sou. ¶ Laver 洗う : parole féminine 女性語. Camiwo Soumasou, カミヲスマス, Laver la tête, ou les cheveux 頭または髪を洗う。
- ゾ ロ Zoro c.-à-d. すなわち *Sömen*, サウメン, Vermicelle そうめん, Parole féminine 女性語。
- チ 、 ゴ Tchitchigo, Père 父 : parole féminine 女性語。
- \* ツキナイ Tsoukinai, Chose impertinente et déplacée. 無作法で当を得ぬこと Parole féminine 女性語。
- ツ ワ Tsouwa, Salive 唾 : parole féminine 女性語。

- \* テ モ ト Temoto || c'est-à-dire すなわち, *Fachi* ハシ Les deux bâtonnets avec lesquels mangent ordinairement les Japonais: それを使って, 日本人が普通食事する二つの小さい棒 (箸)。
- デ ン Den, espèce de tranches, p. ex, de fromage frais. Ces tranches sont faites d'un fromage de haricots pulvérisés, et pétris avec du *Miso*; elles sont mises en brochettes et grillées. (田楽豆腐) たとえば, 新鮮なチーズに似た薄切れの一種, この薄切れは粉末状にされ, みそで捏ねられた豆のチーズで作られている。それらは小串にさして鉄灸で焼かれる。(Le mot *Den* est une expression féminine デンなる語は女性的表現である。)
- \* ト 、 Toto c.-à-d. すなわち *Iwo* ウヲ, Poisson 魚, Parole féminine 女性語。
- \* ニ モ ジ Nimoji, Ail 韭: parole féminine 女性語。  
ネモンジ (ネは子と記される) Espèce d'étoffe blanche du Japon 日本の白ねりの織物の一種 mot féminin 女性的語。
- \* ハギノハナ Faghino fana, boulettes de riz contenant à l'intérieur des haricots en purée. 濃厚スー  
ープ状の豆 (餡) を中に含む米のだんご (parole féminine 女性語)
- \* ハチノミ Fatchinomi, pilon de mortier 乳鉢用の乳棒(すりこぎ) (expression féminine 女性的表現)
- \* ハ ビ ロ Fabiro, laitue ちさ, Expression féminine 女性的表現。  
ハヤシ, ース, ーヤイタ Fayachi, sou, yaita. couper ou trancher 切るまたは薄く切る (expression féminine 女性的表現)
- \* ヒトクサ Fitocousa, manière de compter les genres et les formes des choses 物の種類や形を数える方法 (expression féminine 女性的表現)  
ヒ モ ジ Fmoji, avoir faim 空腹である (parole féminine 女性語)
- \* ヒ ヤ シ Fiyachi, eau froide 冷水 (parole féminine 女性語)  
フ ク ロ Fucouro, mère. (母) Wofoucouro. ヲフクロ, 人は普通ヲフクロという。Non seulement entre femmes, mais entre les autres personnes. 女性のあいたばかりでなく, 他の人々の間でも。  
フタトコロ Foutatocoro, deux endroits ニヶ所 || Qqf. しばしば *Won foutatocoro*, ランフタトコロ mari et femme 夫妻 (parole féminine 女性語)
- ベニダイコン Benidaicon, Radis rose 赤蕪 (parole féminine 女性語)
- ホシ〜 Fochifochi, c.-à-d. すなわち *Mame*, マメ, grains, ou haricots 穀粒または豆 (expression féminine 女性的表現)
- ボ ヽ Parties sexuelles de la femme 女性の性器 (paroles dont se servent les femmes et les jeunes filles. 婦人や乙女の使う言)
- マ ナ Mana, poisson 魚 Parole de femmes. 女性の言, On dit ordinairement *Womana* ラマナ, 人は普通ヲマナという。
- マメヤカニ Mameyacani, avec diligence et zèle 勤勉・熱心に, Parole dont se servent ordinairement les femmes. 普通女が使う言。
- マ ワ リ Mawari, Toute espèce de mets, à l'exception du riz: 米を除く料理の全種類, (お菜) mot dont se servent ordinairement les femmes en y ajoutant *Won* ラン: 普通それにランを加えて使用する語: *Wonmawariga nôte meiwacoudgia*, ランマワリガナウテメイワクヂヤ。N'ayant pas d'aliments variées, éprouver du regret, etc. 種々の食物がないので遺憾に思う, など。
- \* マ ン Man, ou **Mandgiou**, マンヂウ, espèces de miches ou de petits pains de froment, cuits à la vapeur de l'eau bouillante. 沸騰している水の蒸気で煮た丸パンまたは小麦の小パンの



一種, C'est une expression féminine. それは女性的表現である。

- ミ カ ド Micado, c.-à-d. *soba* ソバ Espèce de *Miso* (mélange de haricots, de riz et de sel) menu: (豆・米・塩の混合した) 細いミソ状のもの〔そばがゆか?〕 parole féminine. 女性語。
- \* ム シ Mouchi, c.-à-d. *Miso*, ミソ, Parole féminine. 女性語。
- ムツカリ, ル, カッタ Moutsoucari, rou, catta, Pleurer 泣く, Parole usitée par les femmes: les hommes s'en servent également en parlant des enfants nobles. 女たちによって使用される言: 男たちは貴人の子供に話すときに同じく使用する。
- \* ム モ ジ Moumoji, Blé et orge 小麦と大麦, parole féminine 女性語。
- \* ム ラ サ キ Mourasaki, c.-à-d. すなわち, *Iwachi*, イワシ, Sardine 鯖, parole féminine. 女性語。
- \* メ シ モ ノ Mechimono, Vêtement ou chaussure d'une personne noble. 貴人の衣服または履物, c'est d'ordinaire une parole féminine. それは一般に女性語である。
- \* メ 、 Riz cru 生米, parole féminine 女性語。
- \* ヤ イ バ Yaiba, c.-à-d. すなわち *Momi* モミ, Riz avec l'écorce 粃殻のついた米, Parole féminine 女性語。
- ヤウクワ Yôcoua, c.-à-d. *Mijozou* ミジャウズ Certain aliment fait de riz et d'un mélange d'herbe etc. 米と菜などを混じて作ったある食品, parole féminine 女性語。
- \* ヤ マ ブ キ Yamabouki. 〓 c.-à-d. すなわち *Founa*, フナ, Nom d'un poisson d'eau douce 淡水魚の名 〓 Vin blanc du Japon 日本の白酒 parole féminine 女性語。
- ユ ガ ミ Yougami, Cuiller さじ (匙) Expression féminine 女性的表現。
- \* ユ キ Youki, Mieux より良くいうと Youkino *iwo* ユキノイオ Morue <sup>たら</sup>鱈, Parole féminine 女性語。
- \* ユ キ Youki, Rave 蕪 Parole féminine 女性語。
- \* ユ メ ガ マ シ ヨ Youmegamachii, Chose de peu de valeur, et brève comme les songes: ほとんど価値なく, 夢のように短いこと. parole féminine 女性語 〓 Youmegamachisa 〓 Youmegamachôu
- ユメユメシヨ Yuomeyoumechii, chose petite, minime. 小さい, 極めて小さいこと, Parole féminine 女性語 〓 Youmeyoumechiku ユメユメシク (adv. 副詞) peu 僅かに parole féminine 女性語。
- ヨソイ, ソウ Yosoi, sô. Tirer le riz dans les plats et les *Goki*, ゴキ, ou tasses. 皿, 御器, 茶碗の中へ米を取出す。
- ヨルノモノ Yorouno *mono*, Vêtement de nuit 夜着, parole féminine 女性語。
- \* ヨ ロ コ ビ, ブ, コウダ Yorocobi, bou, cōda 〓 \*Enfanter 子を産む。Cowo *Yorocobou* コヲヨロコブ, ou または Yorocobiwo sourou ヨロコビラスル Enfanter 子を産む。c'est expression féminine dans le *Cami* これは上における女性的表現である。(Ce doit être une antiphrase euphémique; ou une heureuse expression, si elle se rapporte à la fois de la femme devenue mère これは婉曲な反用にちがいない, またはそれが同時に母となった女に関するものであれば幸福な表現である。L.P. パジエス)
- \* ワ カ ト シ Wacatochi Année nouvelle 新年, C'est d'ordinaire une parole féminine それは普通女性語である。
- ワ ラ ワ Warawa, Je 私 (は): parole féminine 女性語。
- \* ワ ア シ Woachi, c.-à-d. すなわち *Jeni* セニ Monnaies, deniers 金銭 Parole féminine 女性語。
- \* ワ イ タ Woita, sel: 塩 parole féminine 女性語。

尼門跡の言語生活からみた女房詞の研究 (I)

- フ デ ゴ Wôdgigo フホデゴ Seigneur, aïeul 殿, 祖父: paroles des femmes ou des enfants 女または子供の言。
- \* フ カ ズ Wocazou, c.-à-d. すなわち Sai サイ, plat ou mets 一皿の料理, Parole féminine 女性語。
- \* フ カ マ Wocama, c.-à-d. すなわち Camaboco, カマボコ, Mets qui consiste en poisson haché 細かく刻んだ魚で作られる料理。
- フ グ シ Wogouchi, Tête d'une personne noble, ou cheveux de la tête: 貴人の頭, または頭髮, parole féminine 女性語。
- フ ツ ケ Wotsouke, *Chirou*, ou bouillon qui se prend avec le riz 飯と共に食べる汁 (ブイヨン) parole féminine 女性語。
- \* フ ナ カ Wonaca, Ventre 腹 Wonaca ga Waroui フナカガワルイ, avoir la diarrhée. 下痢をする parole féminine 女性語。
- フ ナ マ Wonama, c.-à-d. すなわち *Namasou* ナマス (parole féminine 女性語)
- \* フ ハ ガ タ Wofagata, c.-à-d. すなわち *Daicon* ダイコン Rave 蕪 parole féminine 女性語。
- フ ハ グ ロ Wofagouro, Teinture avec laquelle on se noircit les dents au Japon. 日本で人が歯を黒くする染料。 *Wofagouro sourou* フハグロスル, Rendre les dents noires, les noircir 歯を黒くする。 parole féminine 女性語。 *Canewo tsoucourou* カネヲツクル, est l'expression usuelle. は日常表現である。
- フ ヒ ヤ シ Wofiyachi, Eau froide 冷水: parole des femmes, qui s'en servent en parlant de leur seigneur, ou d'une autre personne noble. 彼らの領主または他の貴人に話すときに使用する女性の言。
- \* フ ヒ ラ Wofira, c.-à-d. すなわち *Tainoiwo* タイノイヲ, Pagre, poisson 鯛, 魚: parole féminine 女性語。
- フ ヒ ン Wofin, ou または *wofiron* フヒル, Se réveiller, ou se lever du lit une personne noble. 貴人が目覚める, または起床する。 *Iza wofin are* イザヲヒンアレ, ou または Nasarei, ナサレイ, Holà! que Votre Grâce se lève, etc.: さあ殿, お起きなさい。 parole féminine 女性語。
- フ フ ル Wôfourou, ワウフル chose vieille, comme un vêtement que la seigneur donne à un serviteur. 領主が召使に与える衣服などの古いもの。 *Wôfourouwo coudasarourou* ワウフルラクダサル、, Donner (le seigneur) un vieux vêtement. 古衣を領主が与える。 (parole féminine 女性語)
- \* フ ホ ソ Wofoso, Sardines 鰯 parole féminine 女性語。
- フ マ ナ Womana, Poisson 魚 parole féminine 女性語。
- フ マ ナ カ Womanaca, Lieux d'aisance 便所, parole féminine 女性語。
- フ マ ワ リ **Womawari**, ou または *wocazou*, フカズ (parole féminine 女性語), Variété ou abondance de mets. 多様のお菜。  
*Womawari* フマワリ, ou または *Wocazouga nôte mziwacoudgia* フカズガ ナウテメイワクデヤ。 Ne pas y avoir beaucoup de mets, c'est une peine et un déplaisir. あまりお菜がないので迷惑で不快だ。
- \* フ マ ン Woman, c.-à-d. すなわち, *mandgioü* マンヂウ Petits pains de blé cuits à la vapeur. 饅頭, 蒸気で煮た小麦の小さいパン Parole féminine 女性語: le mot propre est *Man* 本来の語はマンである。

\* フミナメシ Wominamechi, c.-à-d. すなわち, Awa. アワ Miso, avec du millet. 粟でつくったみそ  
parole féminine 女性語。

〔付〕 「ロドリゲス日本文典」の「女子の消息に就いて」 (§ 16-2)

書き言葉としての女房詞は上流婦人の消息文に実践され、室町末ごろには消息文に定着した。  
この事情を示すものに、1604～8年（慶長9～13年）、イエズス会長崎学林刊、ロドリゲス著  
「日本大文典」（3巻1冊）の「女子の消息に就いて」がある。これを土井忠生博士著「ロドリ  
ゲス日本大文典」によって次に示す。

○〔筆者前略〕女子の方から男子へ贈る消息には、書面の終に敬語を書かず、判も月日も加へない。Fumi  
xite, Mairaxe soro (文して参らせそ<sup>く2</sup>ろ), Von vrexiqu soro (御うれしくそ<sup>く2</sup>ろ), Vomoi mairase soro  
(思ひ参らせそ<sup>く2</sup>ろ), Sazosazo (さぞさぞ), Iroiro (いろいろ) などのやうな優しい語が多く使はれる。  
又語頭の綴字を切取ってそれに Monji (文字) という綴字を添へたものは、元の語の意味を表すのであつて、それが使はれる。例へば Fumonji (ふ文字) は Fumi (ふみ) を意味し, Somonji (そ文字) は So-  
nata (そなた), Pamonji (ば文字) は Padre (ばてれ) を意味する。

○以上の外にも特殊な語が多くあつて、女同志の間とか、男子との間とかだけで使はれる。例へば Saque  
(酒) の意の Cucon (くこん)。Midzu (水) の意の Fiyaxi (ひやし)。Iuaxi (鯛) の意の Murasaqui  
(紫)。Mochi (餅) の意の Cachin (かちん)。

注く2は Fumixite mairaxe と続けるべきのもの

なおこの文献では、もじ言葉の「もじ」は「もじ」[modzi] でなく、「もんじ」(Monji) を  
添えるとしてあることに注意したい。

#### 4. 「女重宝記」の「女ことばづかひの事付タリやまと詞」 (§ 17)

##### (A) 解 説 (17-1)

元禄5年(1692年)刊、艸田林子(苗村丈伯)の「女重宝記」の一巻の五には、「女ことばづか  
ひの事付タリやまと詞」という項があり、女性語の原則を説くとともに、女のやわらかな語約  
35, 女房詞の直系である大和言葉約109語計約144語をあげてある。これは徳川時代における  
婦人のことばのしつけの原則と例語を示した良書のさきがけをなすものである。

##### (1) 「女ことばづかひの事」 (§ 17-2)

① 「女ことばづかひの事」 (§ 17-5) の初めの段で、まず男女の言葉づかひに言及して、  
「男の中にそだちたる女は男らしく詞も男にうつる物也 男の詞つかひを女のいひたるは耳に  
あたりて聞にくき物也 女の詞は片言まじりにやはらか成もよけれ もじにあたりこばしなど  
していふ事かへす〜あしき事也 万の詞におともじとを付やはらか成べし」と、女性の使う  
べきことばは男性語に対するものとして、男性語を退け、やわらかさ・上品さを要求している。

##### ② 漢語・流行語を避ける。

- |                   |                          |
|-------------------|--------------------------|
| 一 内の者〔又〕は下々というべきを | けらい けにん<br>家来又は下人といふはあしし |
| 一 奥様御内さまといふべきを    | ないご ないしつ<br>内儀内室などいふはかたし |

などと、§ 17-4のように、婦人の慎むべき語を、「あしし・かたし・すさまじ・しさいらし・  
いや也・口上らし・男らし・石也・ききにくし」として、男性的な漢語の使用を戒め、また  
「時行詞などよき女中の一言ものたまふ事にあらず嗜給ふべし」と流行語を堅く戒めている。

③ 女らしい詞すなわち「女のやはらか成詞」として、「ねる」を「おしづまる」, 「おきる」を「おひるなる」など約35語をあげて、その使用を奨励している。その内訳は動作に関する語16, 数の名5, 食物3〔ひるぐご(昼食)・大まん(壹分饅頭)・小まん(五りん饅頭)], 果物2〔桃のみ・桃のしん(桃のさね)], 魚類1〔とと(うお)], 形容2〔いしい(むまい)・御きげんあしき(気のわるき)・身体人倫3〔おみあし(あし)・おさなひ(子供)・おこたち(子供達)], 遊戯1〔かいおほい(貝合)], その他2〔おみや(みやげ)・御こし(のり物)] となっている。

## (2) 大和言葉 (§ 17-3)

同書の「大和言葉」の項は、着類・食物・青物・魚類・諸道具に分類して、女房詞の直系である「大和言葉」約109語を所収し、その内訳は、衣類11, 狭義の飲食物41, 青物25, 魚類17, 道具13, 動作1〔ひかく(餅を櫛にさしてやく)], その他1〔おさがり(雨ふる)] である。

この項の最後に「右は御所方の詞づかひなれ共地下に用事をゝし」と記して、地下すなわち御所方以外の一般の婦人なども女房詞を用いることが多いとしている。これは元禄時代における女房詞普及の状態を示すものとして注目すべきものである。

## (B) 文 献 (§ 17-4)

### (1) 女重宝記 所載 女ことばづかひの事付タリ屋まと詞 (§ 17-5)

唐土孟子といふ賢人の御母かしこくましまして孟子いとけなき時三度となりをかへ給ふ はじめはあき  
 んどの隣に宿かり給へば孟子うりかひのまねをのみし給ふ 次に寺の辺にすみ給へば死人をほうむるま  
 ねをのみしたまふ 三たびめに学文しやの隣に宿かへ給へば孟子あさゆふがくもんしてつみに賢人と成給  
 ふ されば孟子のごとく成賢人さへなるゝ事に心うつるなればいはんや常の女などはかりにも男ちかくそ  
 だつべからず 男の中にそだちたる女は男らしく 詞も男にうつる物也 男の 詞づかひを女のいひたる  
 は耳にあたりて聞にくき物也 女の 詞は片言まじりにやはらか成もよけれ もじにあたりこぼしなどし  
 ていふ事かへすゝあしき事也 万の 詞におともじとを付やはらか成べし 有増こゝに書付しらしむ

一内の者〔又〕は下々といふべきを 家来又は下人といふはあしし

一奥様御内さまといふべきを 内義内室などいふはかたし

一殿又は御ていなどといふべきを 亭主の男といふはさもし

一もとよりといふべきを 元来の根元のといふはすさまじ

一かさねてといふべきを 以来の向後のといふはしさいらし

一よそへ行かへられましたを 罷出られ罷かへられましたもいや也

一めでたふぞんじますを 珍重に存ますといふも口上らし

一万のはからひといふべきを 万端の了管のといふはうるさし

一私 もをなじ事といふべきを 見とも同前といふは男らしし

一いかふおそなりましたを 莫大に延引しましたといふも石也

一あたひむつかしきといふを 代物高直といふはきにくし

一お過なされ終よりしといふを 往生なされ臨終よきといふは聞にくし

一すきにまゐり過すといふを 好物にて飽食なさるゝといふはかたし

右の外いか程もあれ共ことゝく書記に 及 ず此たぐひをしはかり知べし 此外にくいやつ。誰め。すぎ

と。しかと。ひどい。けびる。やく。いきち。きざし。そふした事。きのとをる。すい。おてき。〔きのとをる。〕やりばなし。かやうの時行詞などよき女中の一<sup>こと</sup>言<sup>ことば</sup>ものたまふ事にあらす<sup>たしなみ</sup> 暗<sup>く</sup> 給ふべし 女のやはらか成詞といふは

子共をおさな<sup>こども</sup>ひ 子共達を<sup>たち</sup>おこたち なくを<sup>なく</sup>おむつかる ねるを<sup>ねる</sup>おしづまる おきるを<sup>おきる</sup>おひるな のり物を<sup>のりもの</sup>御こし<sup>ごし</sup>の  
るを<sup>る</sup>めすと 人よぶを<sup>ひと</sup>めすと 物まいるを<sup>もの</sup>あぐる かみあらふを<sup>かみ</sup>御ぐし<sup>ごし</sup> 物よくまいるを<sup>もの</sup>御手がつく<sup>ごてがつく</sup> 物くいしま  
ふを<sup>ふ</sup>御ぜん<sup>ごぜん</sup> 屋食を<sup>いし</sup>ひるぐご 五分饅頭<sup>まんぢう</sup>大まん<sup>だいまん</sup> 五リン饅頭を<sup>ごりん</sup>小まん<sup>しょうまん</sup> むまいといふを<sup>むまい</sup>いしい<sup>いしい</sup> ありくを<sup>ありく</sup>おひろい<sup>おひろい</sup>  
哥<sup>うた</sup>がるたは<sup>と</sup>いと 貝<sup>かい</sup>合<sup>あ</sup>は<sup>あ</sup>かいおほい みやげを<sup>みやげ</sup>おみや<sup>おみや</sup> あしを<sup>あし</sup>おあし<sup>おあし</sup> 桃<sup>もも</sup>のさねを<sup>さね</sup>も<sup>も</sup>のみ<sup>のみ</sup> うをは<sup>う</sup>いと<sup>いと</sup> 気<sup>き</sup>  
のわるきを<sup>わるき</sup>あしき<sup>あしき</sup> 熱<sup>あつ</sup>さしたるを<sup>あつ</sup>おねる<sup>おねる</sup> 痲瘡<sup>ほうさう</sup>湯<sup>のゆ</sup>かくる<sup>ひく</sup>さか<sup>さか</sup>ひ<sup>ひ</sup> ほうこうを<sup>ほうこう</sup>み<sup>み</sup>やづか<sup>やづか</sup>へ<sup>へ</sup> しん上物を<sup>しんじやうもの</sup>一折<sup>いせつ</sup>と<sup>と</sup> 花<sup>はな</sup>  
一本を<sup>いっぽん</sup>うちと<sup>うちと</sup> 毛<sup>け</sup>升<sup>しやう</sup>を<sup>しやう</sup>一ます<sup>いっます</sup> 一はいを<sup>いっはい</sup>ひとつ<sup>ひとつ</sup> 二つを<sup>ふたつ</sup>一かざね<sup>いっかざね</sup> 大小<sup>だいせう</sup>にゆくを<sup>にゆく</sup>おとうにゆ<sup>おとうにゆ</sup> 琴<sup>こと</sup>をひくを<sup>をひく</sup>だんずる<sup>だんずる</sup>

右此外いくつもあれども此たぐひをしはかり給ふべし〔元禄15年8月刊「玄人」女重宝記」巻一による〕

(2) 女重宝記 所載 大和言葉 着類 食物 青物 魚類 諸道具 (§17-6) (筆者注、次の語例はこ) (そで・わた・おびの順)

〔き る い〕

一おびは<sup>おび</sup>おもじ<sup>おもじ</sup>  
一かやは<sup>かや</sup>かちやう  
一はな紙<sup>かみ</sup>は<sup>かみ</sup>おさつし  
一雨<sup>あめ</sup>ふるは<sup>あめ</sup>おさがり  
一めしは<sup>めし</sup>ぐご  
一あま酒<sup>さけ</sup>は<sup>さけ</sup>あま九<sup>あま</sup>こん  
一せきは<sup>せき</sup>はんは<sup>はん</sup>こはくご  
一もちは<sup>もち</sup>かちん  
一しんこは<sup>しんこ</sup>しらいと  
一あん餅<sup>あん</sup>は<sup>あん</sup>あんかちん  
一よもぎ餅<sup>もち</sup>は<sup>もち</sup>くさのかちん  
一ささげのついたしんこ<sup>ささげ</sup>は<sup>は</sup>ふぢの花  
一やき食<sup>やき</sup>は<sup>やき</sup>むすび  
一そうめんは<sup>そうめん</sup>ぞろ  
一こんにやくは<sup>こんにやく</sup>はやく  
一あづきは<sup>あづき</sup>あか  
一餅<sup>もち</sup>を櫛<sup>くし</sup>にさしやく<sup>さしやく</sup>ひかく  
一のりは<sup>のり</sup>のめじ  
一ささげは<sup>ささげ</sup>さゝ  
一よめがは<sup>よめ</sup>げよめな  
一ごぼうは<sup>ごぼう</sup>ごん  
一あさづけは<sup>あさづけ</sup>あさゝ  
一わらびは<sup>わらび</sup>くろとり  
一うこぎは<sup>うこぎ</sup>うのめ  
一小な<sup>せうな</sup>に<sup>に</sup>ものしるは<sup>ものしる</sup>  
一さは<sup>さ</sup>し柿<sup>かき</sup>は<sup>かき</sup>おさきたゝれ

一こそでは<sup>こそ</sup>ごふく<sup>ごふく</sup>  
一ゆぐは<sup>ゆぐ</sup>ゆもじ<sup>ゆもじ</sup>  
一どんすかやは<sup>どんすか</sup>どんちよう  
一べには<sup>べ</sup>おいろ  
〔しよく物〕  
一みそは<sup>みそ</sup>むし  
一ごとみそは<sup>ごとみそ</sup>さゝぢん  
一饅頭<sup>まんぢう</sup>は<sup>まんぢう</sup>大まん<sup>だいまん</sup>  
一饅頭<sup>まんぢう</sup>は<sup>まんぢう</sup>小まん  
一ぼた餅<sup>ぼたもち</sup>は<sup>ぼたもち</sup>やは<sup>やは</sup>おはき  
一だんごは<sup>だんご</sup>いしゝ

一まめのこ餅<sup>まめもち</sup>は<sup>まめもち</sup>きなこかちん  
一わらび餅<sup>わらびもち</sup>は<sup>わらびもち</sup>わらのかちん  
一あわは<sup>あわ</sup>おみなへし  
一入みそは<sup>入みそ</sup>おぢや  
一ひやむぎは<sup>ひやむぎ</sup>きり  
一でんがくは<sup>でんがく</sup>おでん  
一まめのこきなこ  
一ひしほは<sup>ひしほ</sup>あまむし

〔あ そ 物〕

一ほしなは<sup>ほしな</sup>ひば  
一ほしうりは<sup>ほしうり</sup>はりゝ  
一なは<sup>な</sup>おは  
一くきは<sup>くき</sup>くもじ  
一松<sup>まつ</sup>だけは<sup>まつ</sup>まつ  
一いものは<sup>いもの</sup>にあつきの汁<sup>じゆ</sup>ふししる  
一干大根<sup>ほしだいこん</sup>に<sup>に</sup>よめなは<sup>よめなは</sup>  
一杉<sup>すぎ</sup>ばしは<sup>すぎ</sup>かうばいのはし  
一ふなは<sup>ふな</sup>やまぶき

一わたしは<sup>わたし</sup>御なか<sup>ごなか</sup>  
一よぎは<sup>よぎ</sup>よるの物<sup>よるのもの</sup>  
一本綿<sup>もめん</sup>が<sup>が</sup>やめんちよう  
一水<sup>みづ</sup>は<sup>みづ</sup>おひや  
一こめは<sup>こめ</sup>うちまき  
一さけは<sup>さけ</sup>九<sup>く</sup>こん  
一こぬかは<sup>こぬか</sup>まちかね  
一ちまきは<sup>ちまき</sup>まき  
一あづき餅<sup>あづきもち</sup>は<sup>あづきもち</sup>あかのかちん  
一ほらがいは<sup>ほらもち</sup>ほらのかちん  
一たうきび餅<sup>たうきもち</sup>は<sup>たうきもち</sup>もろこし  
一そばかい餅<sup>そばかいもち</sup>は<sup>そばかいもち</sup>うすずみ  
一ふのやきは<sup>ふのやき</sup>あさがほ  
一なめしは<sup>なめし</sup>はのぐご  
一たうふは<sup>たうふ</sup>おかべ  
一きらずは<sup>きらず</sup>おかべのから  
一ゆのこは<sup>ゆのこ</sup>おゆのした  
一しやうゆは<sup>しやうゆ</sup>おしたし  
一なすびは<sup>なすび</sup>なす  
一ちさは<sup>ちさ</sup>おはひろ  
一大<sup>だい</sup>こんは<sup>こん</sup>からもの  
一かうの物<sup>かうもの</sup>は<sup>かうもの</sup>かうゝ  
一つくゝしは<sup>一つく</sup>しは<sup>し</sup>つく  
一竹<sup>たけ</sup>のこは<sup>たけ</sup>たけ  
一ずいき汁<sup>じゆ</sup>は<sup>じゆ</sup>つゆのおつけ  
一しほは<sup>しほ</sup>なみのほな  
一白<sup>しろ</sup>は<sup>しろ</sup>しは<sup>し</sup>ねもじのはし  
一さけの魚<sup>うを</sup>は<sup>うを</sup>あかおまな

〔きよるい〕

尾門跡の言語生活からみた女房詞の研究 (I)

一鱒 <sup>ます</sup> のうをは <small>あかおまな</small>	一かずのこは <small>かず</small> 〜	一鱒 <sup>いわし</sup> は <small>おひらとも おぼそ共</small>
一くじらは <small>おさぐり</small>	一たらは <small>ゆきの</small> おまな	一ずずは <small>すもじ</small>
一たこは <small>たもじ</small>	一いかは <small>いもじ</small>	一するめは <small>する</small> 〜
一かつうをは <small>か</small>	一小たいは <small>こひら</small>	一ごまめは <small>ことの</small> ぼら
一いひずしは <small>同上</small> 〔ことのぼら〕	一ぬびは <small>ぬもじ</small>	〔た う く〕
一ぜには <small>おはし</small>	一金 <sup>ぶ</sup> 走 <sup>ひき</sup> 歩 <sup>ひき</sup> は <small>百<sup>ひき</sup>疋</small>	一ぜに百は <small>一すじ</small>
一一文 <sup>よ</sup> 二文 <sup>四</sup> は <small>一つ二つ</small>	一ますは <small>四<sup>よ</sup>ほう</small>	一かななべは <small>かんくろ</small>
一かみそりは <small>を<sup>な</sup>けたれ</small>	一なべかまは <small>くろ</small>	一いかきは <small>せきもり</small>
一れんぎは <small>こがらし</small>	一せつかいは <small>うぐひす</small>	一しやくしは <small>しやもじ</small>
一哥 <sup>ご</sup> かるたは <small>を<sup>しよ</sup>のまつ</small>	右は御所 <sup>ごしよ</sup> 方 <sup>がた</sup> の詞 <sup>ことば</sup> づかひなれ共地下 <sup>ちげ</sup> に用事 <sup>もちゆる</sup> を <sup>し</sup> し〔元禄15年8月刊行「系人女重宝記」巻一による〕	

5. 「女中言葉」(正徳本) (§ 18)

この「女中言葉」は、東北帝大狩野文庫所蔵の写本(正徳2年〔1712年〕2月15日写)と東大研究室所蔵の写本とを比較校合して、菊沢季生氏が昭和9年8月号「方言」に「女房言葉に就いて」と題して載せられた「女中言葉」によった。

これによると、「女中言葉」と題する狩野文庫本には次の奥書がある。

根井新兵衛玄知

正徳貳年<sup>壬辰</sup>二月十五日  
赤是伴蔵殿え

すなわち、狩野文庫本は正徳2年の写本であることが知られる。東大本は筆者も年代も不明である。狩野本の方が東大本よりよいように思われるが、両者を校合して、東大本にのみあるものは(ト)、狩野本にのみあるものは(カ)とし、かなづかいも原文のままにされている。この文献(狩野本と東大本と校合したもの)には、女房詞など総計503語を掲げてある。

なお本書は§19で解説する「女言葉」(伊藤幸氏写本)や§20の「女中詞」(亀田次郎氏蔵本)と一類のものであるが、これら一類の女中詞語彙集のさきがけをなすもののようである。

(1) 本書の記載形式は、冒頭に、

一、三つの初	正月朔日の事 (カ)		
一、わかなの節句、人の日トモ	正月七日の事 (カ)		
一、ももの節句、みさゝ草の節句	正月三日の事 (カ)		
一、あやめの節句、ふききの御祝儀トモ	五月五日の事 (カ)		
一、文月の節句、かちの葉のいわる	七月七日の事 (カ) ……を掲げ、中ほどに、		
一、あさあさ	あさづけの事	一、くもじ、おはづけ	くきづけの事 (カ)
一、白子草 (カ) 白根草 (ト)	いもがらの事	一、をかべ	とうふの事
一、せんもじ	せんじ茶の事 (中略)	最後は次で終っている。	
一、琴は	だんずると云 (カ)	一、花は	一ともとと云 (カ)
一、つみまつ	歌がるたの事 (カ)	一、なし物	たたきの事 (カ)

(2) その内訳を示すと、

狭義の飲食物 131, 魚介 46, 果物野菜35, 鳥類 8, 植物49, 衣類44, 文具・日用品・道具72,

紙類8, 人倫・人称17, 身体9, 数の名8, 形容・動作40, その他3〔おみや(おみやげ)・御はなから(かふでん)・うがい(手水)〕である。なお本書には、従来あまり見られなかった「一おまへさま 奥様と云事, 一そもじそなたと云事」など人倫・人称関係が7語掲げられている。

## 6. 「女 言 葉」(伊藤幸氏写本)(§19)

この「女言葉」は、東北帝大狩野文庫所蔵の写本で、享保7年(1722)2月22日に伊藤甚右衛門幸氏が写したとの奥書のあるものを、菊沢季生氏が昭和9年12月号「国語研究」に「女言葉——伊藤幸氏」と題して載せられたものによった。

この資料には、奥書に次の識語がある。

右童女指南為稽古諸書考記畢、後人者増補猶女子朝夕之言語之為序有指南候也

伊藤甚右衛門幸氏

享保七年<sup>壬寅</sup>二月廿二日

本書の記載形式は、冒頭に、

- |           |                         |           |                |
|-----------|-------------------------|-----------|----------------|
| 一、正月朔日のこと | みつの初と云                  | 一、正月七日のこと | 若なの節句、人の目とも云   |
| 一、三月三日のこと | 桃の節句、みき草の節句             | 一、五月五日のこと | あやめの節句、ふきき草の節句 |
| 一、七月七日のこと | 文月の節句、かちのはの節句……(中略)を掲げ、 | 卷末は       |                |
| 一、かうかのこと  | かんじよ                    | 一、昆 布     | ひろめと云          |
| 一、梅干を     | おしわ物                    | 一、お火上り    | 枕置しのこと         |

で終り、女房詞など433語を掲げている。

この「女言葉」は、既述の「女中言葉」(正徳2年・1712年)や次項で述べる亀田次郎氏蔵本「女中詞」と大同小異であるが、三書のうち、本文は最も精確で、女房詞などの所収語は本書が433語、§18で解説した「女中言葉」(狩野本と東大本の両書を校合したもの)は503語、「女中詞」は331語である。語数も本書が狩野本の「女中言葉」、東大本の「女中言葉」や、次項の「女中詞」より多い。

## 7. 「女 中 詞」(亀田次郎氏蔵本)(§20)

「女中詞」は、亀田次郎氏蔵本を玉岡松一郎氏が、昭和9年11月号「方言」に「女中詞(亀田次郎氏蔵本)」と題して載せられた「女中詞」によった。

この「女中詞」は、表紙・用紙・書体などからして、享保ごろのものと推定され、§18で解説した正徳2年書写の狩野文庫本「女中言葉」とほぼ同年代の写本と思われる。

内容は、同じく§18で解説した東大本「女中言葉」と、ほとんど近似している。ただ本書のやや著しい特徴としては敬意の接頭語「お」をつけてあることが東大本より一層多く、「お敷たへ・おめんでふ・おふみ・おけたれ・おそへこ・お油とり・お它炷・お它懸・おかわほり・お手なれ草・おつたみ・おひるくこ・およこし・おくろ物・おかうかう・おとし・おかんくろ」の17語に冠され、反対に東大本で「おはかため・おかい」とあるのが、亀田本では「はかため餅・かい」となっている。

またこの本では、正徳本「女中言葉」・伊藤幸氏写本「女言葉」より漢字を用いることが一

層多くなっている。

本書の記載形式は冒頭に、

一、白かさね	白無垢なり	一、山吹とは	黄無垢なり
一、御身こり	単物事	一、うくひす	裕の事
一、おかさね		一、なはた絹	
一、いわた帯	懐妊帯也……………を掲げ、中ほどに、		
一、かこもり	野老	一、かい老	海老
一、たけとは	きのこ	一、木のめ	柚の葉
一、こんとは	牛蒡の事（中略）、最後は、		
一、草きぬ	被なり	一、おまわし	腰巻
一、うす絹共		一、つほなり	かいとり
一、長かつら	長かもし也	一、ほろぎ	
一、なかかけ			

で終り、女房詞など計 331 語を掲げてある。

#### 8. 「女今川姫鏡」の「京女郎詞よせ」 (§ 21)

宝鏡13年（1765）7 月刊（京都菊屋七郎兵衛板元）所収の「京女郎詞よせ」の項に、

- |  |  |
|--|--|
| ○父 <sup>ちち</sup> をたらちを又 <sup>また</sup> ともじといふ | ○母 <sup>はは</sup> をたらちめ又 <sup>また</sup> かもじといふ |
| ○男 <sup>なんし</sup> 子 <sup>こ</sup> をわこといふ      | ○女子 <sup>むすめ</sup> をおごりやうと云                  |
| ○御内儀 <sup>ごうちぎ</sup> をおくさまと云……………を最初に掲げ、最後は、 |  |
| ○ぼたもちをおはぎ                                    | ○あま酒をあま九こん                                   |
| ○ごとみそをささちん                                   | ○ちまきをまきといふ                                   |

で終り、京女郎詞55語を集めてある。その大部分は女房詞である。

#### 9. 「草むすび」 (§ 22)

「草むすび」は、将軍徳川吉宗の次子田安宗武（1715～1771年）の著の「玉函叢説」巻四に収められている。本書は、田安家の女房たちの女房詞による言語生活に対する宗武の否定的・尚古的・階級的言語観を示すとともに、同家で実地採集した女房詞34語を一々批判した女房詞批判書として、特異な存在である。

なお「草むすび」については、岩淵悦太郎氏の「女房詞とくさむすび」（昭和9年8月「方言」）という詳論がある。（また本稿の引用文は土岐善麿博士の高著「田安宗武」第四冊所収の「草むすび」によった。）

##### (1) 宗武の女房詞観

巻頭の総論において、女房詞を次のように卑しいものとして排斥している。

雪をおもみ、すゑくだちゆくまに、人のことばもいやしうなりもてゆくは、なゆ竹の世の常なめれど、をみな言葉ばかり殊にあさましきものはある。いそのかみふりにし物の名のうるはしきをも、あらぬさまにひかへなどするよ。またあるは、さるうるはしき名のあるにはあらで、文字のままに聞ゆる、またおろかなる名などつきたるものは喚びかへすべかめれど、そのかへ聞ゆるが中々にもとつ名よりしもあしかめるぞあさましき。さればかかることばしも、此御館には近うさむらふをばいましめおきでさせたまひて、草木にもあらぬはしたうどならでは聞えぬなるべし。さてかのあやしうひかへもて来ににし事は、大勝金剛院の僧正と聞えし人の記したまひけん「張のもくつ」てふふみに、内裏仙洞のみにて喚びけるを近頃は將軍家にも女房は皆異名を申すとぞある。さらば明徳応永などいふらんほどにや初まりけん。いでや内の女房たちなどのいひそめたまひなば、いとうるはしうあるべきに、こよなうひきかへていやしげなるこそ心ゆかね。もしは下人たはれめなどのいひそめたるが、よつの海浪たちさわぎたる風のま



にまに玉しく庭にも聞えそめつるにや、いともいぶかしきわざなりけり。そもそもかの金剛院の記には、今聞ゆることばも又聞えぬも侍るなり。おまへに御つれづれなるをり、いぶかしからんをあげつるひて、かつはおごれらん心をもしるしものせよとのたまはするに、いとたへがたうおもふたまふれど、まことしく仰せたまはんには、あるが中になにのあやめも弁へ侍らぬをもとより知らせおはしませば、御たはむれにてもいなみ奉らんはかしこうおぼえ給へて、おるおるものして奉るになん。

## (2) 宗武の試みた女房詞各語に対する批評

次に各論で具体例をあげている。たとえば、

飯を供御といふ。おほやけにたてまつるをこそさはいふめれ。ただ人の料にしもいふよ、いとも恐しき。  
(おほやけとは、ここにては禁裏仙洞などを申したる也。ただ人とは凡人をいへり、恐きとは凡人の食物を供御と唱ふる事は甚恐多き事なればいへり。) すべての御物をも供御の物といふを、飯をのみいふもいかにぞや。

宗武が禁裏・仙洞に奉るものを「供御」というべきなのに、ただ人(凡人)のにもいうのはいとも恐れ多いとしているのは、宗武の階級的意識によるところが多い。このように「供御」(飯)以下、ささ(酒)・おめぐり(菜)・おは(菰)・おひや(冷水)・あか(小豆)・やはやは(搔餅)・かうかう(香の物)・にやく(こんにやく)・ぞろ(索麵)・うちまき(米)・おひら(鯛)・かべ(豆腐)・かず(数の子)・から物(蘿蔔)・ごん(午房)・かちん(餅)・むし(未醬)・しろもの(塩), わら(蕨)・つく(つくづくし)の類, こもじ(鯉)・ふもじ(鮒)の類, むらさき・おむら・おほそ(いわし)・おいろ(べに)をあげ、一々について語原を説き、これを批判している。

本文中において、おひや(冷水)・ごん(午房)・おつけ(汁)・むし(味噌)・やわやわ(搔餅)などは、下層階級語の取入れられたものだから卑しいといっている。各語について、その由来を説明し、ぞろ(索麵)は食べる時の音から、かべ(豆腐)は壁の色との連想だとし、「お」ことばや「もじ」言葉に対する見解も含まれている。しかし宗武の女房詞に対する考えには偏ったところがあり、尚古思想や階級意識に結びつけた独断も多い。

## (3) 所収語彙の内訳

この書には、女房詞34語を収め、狭義の飲食物19語、野菜6語、魚類6語、化粧1語(おいろ—べに), 食器1語(黒物—鍋), 天候1語(おさがり—雨)となっている。

今、これらの語と宗武も引用している「蟹藻屑」所収の語と比べてみると、次のようになる。

① 「蟹藻屑」所掲の18語中、13語までが「草むすび」に記されている。

② 「蟹藻屑」に記されて、「草むすび」に所収されない語(4語)〔ウツホ(ヒトモジ)・ツモジ(ツグミ)・スイバ(相原)・ヒキ(引合)〕

③ 「蟹藻屑」と同じ標語を挙げながら、異名の語(1語)〔索麵を「蟹」ではホソモノ, 「草」ではゾロ〕

## 10. 「女諸礼綾錦」の「大和こと葉」(§23)

寛政8年(1796年)5月刊, 北尾辰宣著の「女諸礼綾錦」(全)は、当時の女性の守るべき諸礼儀の作法を記載したもので、その七の巻の「大和こと葉」の項で、大和言葉71語を所収してい

る。

本書の記載形式は、冒頭に、

一着物 <sup>きるもの</sup> は	小そで	一布子 <sup>ぬのこ</sup> は	御卑衣 <sup>おひへ</sup>
一帯 <sup>おび</sup> は	おもし	一內衣 <sup>ゆぐ</sup> は	ゆもし
一夜着蒲団 <sup>よぎふとん</sup>	よるのもの	を揚げ、(中略) 最後は次で終わっている。	
一子 <sup>こ</sup> 供 <sup>とも</sup>	こたち男はわこ女はひめご	一内儀 <sup>ないぎ</sup>	うもじ
一むすめ	五もし 御りやう人とも	一かもしといふはかみさまといふにもかゝさまといふにもかよふなり	

所収語彙の内訳は、衣類 6，狭義の食物 31，魚類 7，道具 7，身体 2〔おぐし(髪)・おみあし(足)〕，動詞 9，形容詞 1〔いしる(甘美・むまひ)〕である。

なお同名で別書の木村繁雄著「増補女諸諸礼綾錦」(天保13年・1841年刊)の下巻にも「大和言葉」65語を所収してある。これは北尾本のものと類似し、最後に「右の外はよき人にまじはりてその言葉にならひ覚ゆべし」と添えてあり、よいことばを身につける方法をも簡明に述べている。

#### 11. 「女万宝操鑑」の「女の物いひつつしみの事并女の遣ふ言語の事」 (§ 24)

寛政13年(1801年)刊、藤井懶斎述の「女万宝操鑑」では、その175項で、「女の物いひつつしみの事并女の遣ふ言語の事」を掲げてある。

##### (1) 「女の物いひつつしみの事」

ここでは、「女中などのあらけなき東夷のことばをいひ片言まじりにいひちらし哥物語のてにおはをちかへなとするは興さめておほえ侍る物なり」とし、「女中はなほしも言語のつゝしみたしなみかんやう也 まづいひて益なき事はいはずしもありたきものと知べし 言多ければ偽多し」といい、「わか口をば酒瓮<sup>さかがめ</sup>の口のやうにかたく紙にてはり塞内<sup>ふさぎ</sup>より言<sup>ことば</sup>の出ぬやうにとのつゝしみなり」とまで極言している。

##### (2) 「女の遣ふ言語の事」

ここでは、女中のつかう大和詞を「着類并諸道具<sup>やまとことば</sup>の和言<sup>やまとことば</sup>の事」(大和詞34語)、「食類の事」(同38語)、「青物の名の事」(同24語)、「魚類の名の事」(同16語)、「道具名の事」(同9語)に分類して、総計 121 語を掲げてある。既述の「女重宝記」の「大和言葉」と例語が大同小異であるところから、本書は前書を手本とし、これに若干増補したものとみられる。

#### 12. 新資料「公家言葉集存」(草案) (§ 25)

##### (A) 解説 (§ 25-1)

「公家言葉集存」(草案)は、昭和19年(1944年)、華族会館旧堂上懇話会<sup>とうしょう</sup>(同幹事大原重明伯爵)が当時の広義の公家言葉を集めた草案で、敬称・人称・小児語・女官女職・飲食物・身体・衣服品物・動作・形容・殿舎・その他など10項に分類して、総数 372 語を収めてある。

その方法は、後記のように、旧公家衆や河鰭実英氏<sup>ばた</sup>などの資料を大原重明伯爵・正親町<sup>あつ</sup>鍾子典侍・山口・穂積旧女官で検討して定めたものである。これをわら半紙 8 枚(縦書二段組)に謄

写印刷の上、回覧して、各公家に増補を依頼した。「本文」所掲の「公家言葉集存」草案はその完成をみななかったが、旧堂上会(京都)の厚意によって、ここにその草案を掲げることができた。

ここに紹介する新資料「公家言葉集存」は、上述のように、昭和18・9年のころ、華族会館旧堂上懇話会の組織を通して、公家自身が中心になって共同調査したものであること、公家言葉語彙集として、ほとんど最初の文献であり、従来あまり学界に知られていなかったこと、この広義の公家の言葉集によって終戦前の狭義の公家ことば、宮中の女官ことば、尼門跡ことばなどの実態がわかる点、所載語が372の多数にのぼることなど、以上の諸点からみて、きわめて注目すべき貴重な新資料である。なお、文献の各語には便宜筆者が番号を付した。

本書所収の372語の内訳は、敬称17、人称(公家衆の自称およびその家中よりの呼称)41、小児語7、女官女職20、飲食物131、身体18、衣服品物59、動作・形容68、殿舎5、その他6である。

本書の公家言葉と女房詞との異同の考証は後日にゆずるが、その大多数は女房詞であると思われる。たとえば本書所収の372語中、大聖寺門跡自身が使用しないと回答した語は、大要次の63語(うち約20語はナマグサ類で、尼門跡では食べないから使用しない。〔( )の中は大聖寺でいういい方〕)に過ぎない。

41アモジ	48尊 公	50左府公	51右府公
52内府公	56ワ シ	57コ チ	67ウチノ ニョ ウバウ
70大スモジ	71権スモジ(ゴンスケサ ンという)	72新スモジ(新スケサン という)	94コワクゴ?
105烹 雑	110オカキ(町ことばで、 使わない)	115ゾロゾロ	117スモジ(オスモジ という)
121オイシイシ	125チリチリ	131ササ(オッコン という)	136ネリオッコン(ネリッコン という)
137天 野(アマツコン という)	141ム シ(オムシ という)	154ワリフネ	158カ ベ(カベシロモノ、 オカベという)
172ネブカ	174フタモジ	175ニモジ	182アンラ 185グ ジ
188アホソ	189アカオマナ	192ナガイオマナ	193クチホソ
194カ ザ	195シラナミ	201ヤマブキ	202コモジ
205コウバイ	206リョ ウリョ ウ	207タツクリ(コトノハラ という)	210オナガ
213オナマ	214オハマ	215クロオトリ	216シロオトリ
221クモジ(つけもの という)	247シマカミ	250御カクシモノ(オヒヨ という)	253オンタノモノ
260ヤハヤハ(綿)	265オスエ	273ミツアシ	274ケタル(ケタレ という)
275オケタ	287清 <sup>キヨシ</sup>	303オヒル(オヒルナル という)	308クモジ
340オナデ	348キョ クンナコト	349キョ ウガル	355与 達
366閑 所(オトウ という)	368御徳目		

(B) 文 献 (§ 25-2)

公 家 言 葉 集 存			○左記ハ公家言葉 右記ハ註釈ナリ	
(一) 敬 称				
1主 上 <sup>シヌ シヤウ</sup>	天皇陛下	7皇后サン <sup>クワウザウ</sup>	皇后陛下	13君サン 同 上 <sup>(生源寺田 女官談話)</sup>
2当 今 <sup>タウ ギン</sup>	同 上	8皇太后宮 <sup>クワウダイコウグウ</sup>	皇太后陛下	14、、、宮 皇族殿下
3禁中サン <sup>キンチュウ</sup>	同 上	9大宮サン <sup>オホミヤ</sup>	同 上	15、、(宮)サン 同 上
4御カミ <sup>オ</sup>	同 上	10東宮サン <sup>トウグウ</sup>	皇太子殿下	16御息所サン 同上の妃殿下
5御 所 <sup>ゴ ショ</sup>	同 上	11東宮サン <sup>ハルノミヤ</sup>	同 上	17、、君サン 同 上
6皇后宮 <sup>クワウゴウグウ</sup>	皇后陛下	12御息所サン <sup>ミヤスドコロ</sup>	皇太子妃殿下	

尼門跡の言語生活からみた女房詞の研究 (I)

(二) 人 称 公家衆の自称及その家中よりの称呼

18御所様 <small>ゴ ッサン</small>	摂家清華大臣家以上の主人	32奥方サン <small>サン</small>	同上(同上)	46何様 <small>サン</small>	同輩同志の時
19大御所様 <small>オホゴ ッサン</small>	同上の隠居	33若様 <small>サン</small>	子息(諸家堂) <small>上家</small>	47ソナタサン	貴 君
20若御所様 <small>ワカゴ ッサン</small>	同上の若主人	34、、、丸様 <small>サン</small>	同上(同上)	48尊 公	同上(公家男子) <small>問の語</small>
21殿 様 <small>トノ</small>	諸家堂上家の主人	35オチゴサン	同上(同上)	49アナタ	同上
22大殿様 <small>オホトノサン</small>	同上の隠居	36、、、姫様 <small>サン</small>	子女(諸家堂) <small>上家</small>	50左府公	大臣に向ひ話す時
23若殿様 <small>ワカトノサン</small>	同上の若主人	37トウサン	子息子女(諸家堂) <small>上家</small>	51右府公	大臣に向ひ話す時
24お方サン	方領米を拝受する息	38、、、君	清華以上にて父母より子と呼ぶ時	52内府公	同 上
25御簾中様 <small>ゴレンチウサン</small>	室(摂家) <small>清華</small>	39、、、丸	諸家堂上家にて父母より子と呼ぶ時	53ソナタ	其 方
26君 様 <small>キミ</small>	宮様より御降嫁の室	40、、、姫	同 上	54ソモジ	同上(目下)
27御裏様 <small>オウラサン</small>	武家より(摂家)嫁せる室(清華)	41アモジ	姉(正親町家の例による)	55ソ チ	同 上
28、、、君様 <small>サン</small>	子息(摂家) <small>清華</small>	42ヒモジ	姉	56ワ シ	自分の事
29、、、君様 <small>サン</small>	子女(摂家) <small>清華</small>	43家女房 <small>イヘノ</small>	側室(直接に呼ぶ時は名を呼ぶ)	57コ チ	同 上
30御督様 <small>オカミサン</small>	室(諸家堂) <small>上家</small>	44ソノ御所様 <small>ゴ ッサン</small>	あなた様(清華以上) <small>上の家</small>	58部 <small>ベエ</small>	下 僕
31奥 様 <small>サン</small>	武家より(諸家堂)嫁せる室(上家)	45御 前 <small>ゴ</small>	あなた(男女) <small>共</small>		

(三) 小児語

敬称(父母兄弟姉妹、実子として他家へ入家せし時も同様に称す)

59御申様 <small>オマウサン</small>	御孟様とも記す事あり	61御出居様 <small>オデエサン</small>	諸家堂上家にて父上を称す	65、、、サン	弟又は妹(宮中) <small>皇上</small>
60御多々様 <small>オタフサン</small>	宮中宮家をはじめ奉り摂家清華大臣家にて父上を称す	62オタアサン	同上の母上を称す		
		63御兄サン <small>オニイ</small>	兄(宮中) <small>皇上</small>		
	宮中宮家をはじめ奉り摂家清華大臣家にて母君を称す	64御姉サン <small>オネイ</small>	姉(宮中) <small>皇上</small>		

(四) 女 官 女 職

66ニョクワン 女 官	73内 侍 <small>ナイ シ</small>	掌 侍	80大乳人 <small>オホチノヒト</small>	命婦の次席
67ウチノニョバウ 内女房 (主上御侍附の女官・即ち典侍) (掌侍・命婦・女蔵人・御差)	74長橋 局 <small>ナガハシノツボネ</small>	勾当掌侍 (日向の取締り) (をす職掌)	81三 頭 <small>ミ カシラ</small>	大典侍・勾当掌侍・伊豫命婦の頭をいふ
68ス ケ 典 侍	75今 参 <small>イマ マカリ</small>	新らしく奉仕せる高級の女官	82三仲間 <small>ミナカマ</small>	御末・女孺・御服所をいふ
69ダイスケ 大典侍(奥向の取締り) (をす職掌)	76メウブ	命 婦	83雑 シ 仕 <small>ザツ シ</small>	仲居・茶之間をいふ
70大スモジ 同 上(御湯殿の上の日記)	77ニョクラウド 女蔵人		84針 シ 女 <small>シン</small>	女官の御局に於ける上級の女中
71権スモジ 権典侍(同 上)	78オサン	御 差	85仲 ナカ 居 <small>ナカ</small>	女官の御局に於ける台所の女中
72新スモジ 新典侍(同 上)	79御下様 <small>オシモサマ</small>	命婦・女蔵人・御差を総称す		

(五) 飲食物に関する称呼

86ウチマキ 米(高倉子爵談話)	92ホモジ 乾飯(高倉子爵談話)	98オユノシタ 焦飯の粥
87オヨネ 同 上	93コワゴ 赤飯(大原伯爵談話)	99ウスズミ 蕎 麦 粥 (御逸事 明治天皇の御逸事を藤 波子爵の調査せしもの)
88オクマ 御供米(高倉子爵談話)	94コワクゴ 同 上(同上)	100オカチン 餅(高倉子爵談話)
89ゴゼン 飯(御上の)(大原伯爵談話)	95フキヨセ かやく御飯にだしの のつけをかけてたもの	101オベタバタ 餅に箔をまぶした もの
90オバン 同 上(女官の料)	96オフタタキ 二度たきの飯	102オススリ お汁粉(大原伯爵談話)
91ハ ン 同 上(自分の飯)	97オユニ 粥	103御焼ガチン ヒシハナドラ 菱 葩

人 文 学 報

104小 <sup>コイタダキ</sup> 戴	同形の餅片に少し許りの小豆餡 <small>(但し砂糖なし)</small> を盛りたるもの	141ム シ	味噌 <small>(御逸事)</small>	180ツ ク	土 筆 <small>(御逸事)</small>
105煮 <sup>バウ</sup> 雑 <sup>ザウ</sup>	正月元日に聞し召さるる御雑煮の一種	142オムシ	同 上 <small>(御湯殿の上の日記)</small>	181ワ ラ	蕨 <small>(同上)</small>
106オアサノモノ	朝聞し召す餅	143オシタヂ	醬油 <small>(高倉子爵談話)</small>	182アンラ	花 梨 <small>カリン</small>
107オヒシ	菱餅 <small>(御逸事)</small>	144オツユ	すまし汁 <small>(生源寺旧女官談話)</small>	183オマナ	魚 <small>(大上臈御名之事)</small>
108ヒシガチン	同 上	145オムシノオツユ	味噌汁	184オヒラ	鯛 <small>(御逸事)</small>
109カキガチン	かき餅	146オミオツケ	同上 <small>(高倉子爵談話)</small>	185グ ジ	甘 鯛
110オカキ	同 上	147オカウコ	漬 物 <small>(生源寺旧女官談話)</small>	186オカカ	鯉 節 <small>(御逸事)</small>
111イリイリ	豆の入りしあられ <small>(生源寺旧女官談話)</small>	148オクモジ	菜の漬物	187オムラ	鰯 <small>イワシ</small> <small>(同上)</small>
112ソモジ	蕎麦 <small>(高倉子爵談話)</small>	149カウモフリ	沢 庵 <small>(御逸事)</small>	188オホソ	同 上 <small>(高倉子爵談話)</small>
113ヒヤゾロ	冷 麦	150スイクモジ	すぐき <small>(高倉子爵談話)</small>	189アカオマナ	鮭 <small>(御逸事)</small>
114ゾ ロ	索麩 <small>(御逸事)</small>	151オマワリ	副食物 <small>(同上)</small>	190エモジ	鰻 <small>(同 上)</small>
115ゾロゾロ	同上 <small>(御水尾院年中行事)</small>	152ヒドリモノ	焼きものの総称 <small>(同上)</small>	191ユ キ	鰯 <small>イワシ</small> <small>(同上)</small>
116オスモジ	鮎 <small>(高倉子爵談話)</small>	153オアヘノモノ	和物 <small>(生源寺旧女官談話)</small>	192ナガイオマナ	鱧 <small>ハモ</small> <small>(同上)</small>
117スモジ	同上 <small>(大上臈御名之事)</small>	154ワリフネ	磨 <sup>スリメカ</sup> 糠 <small>(御逸事)</small>	193クチホソ	鯰 <small>カマス</small> <small>(同 上)</small>
118ヤハヤハ	萩餅 <small>(高倉子爵談話)</small>	155イ ト	納 豆 <small>(御湯殿の上の日記)</small>	194カ ザ	蛸 蛸 <small>カザメ</small> <small>(同上)</small>
119オマン	饅頭 <small>(御逸事)</small>	156ニャク	葛 蕨 <small>(同上)</small>	195シラナミ	鰯 <small>エソ</small> <small>(同 上)</small>
120オセン	煎餅 <small>(生源寺旧女官談話)</small>	157カベシロモノ	豆 腐 <small>(御逸事)</small>	196タモジ	鰯 <small>タコ</small> <small>(同 上)</small>
121オイシイシ	団子 <small>(御逸事)</small>	158カ ベ	豆 腐 <small>(御湯殿の上の日記)</small>	197サモジ	鯖 <small>(高倉子爵談話)</small>
122イシイシ	同 上	159オカベ	同 上 <small>(生源寺旧女官談話)</small>	198ユカリ	鯰
123マ キ	粽 <small>(御逸事)</small>	160ヤキオカベ	焼豆腐 <small>(高倉子爵談話)</small>	199カズカズ	数の子
124ウキウキ	白玉 <small>(御逸事)</small>	161アゲオカベ	揚豆腐 <small>(生源寺旧女官談話)</small>	200ウ	鰻
125チリチリ	麦こがし <small>(大原伯爵談話)</small>	162ウノハナ	豆腐の殻 <small>(高倉子爵談話)</small>	201ヤマブキ	鮒 <small>(御逸事)</small>
126チリノコ	同 上 <small>(同上)</small>	163ア カ	小 豆 <small>(御逸事)</small>	202コモジ	鯉 <small>(同 上)</small>
127キイモ	薩摩芋	164アヲモノ	菜 <small>(生源寺旧女官談話)</small>	203イモジ	烏 賊 <small>(同 上)</small>
128ヤヤイモ	小 芋	165軒 <sup>ノキ</sup> 信 <sup>シノブ</sup>	乾 菜 <small>(高倉子爵談話)</small>	204スルスル	鰯 <small>(大上臈御名之事)</small>
129オヒヤ	水 <small>(御逸事)</small>	166オハビロ	高 苳 <small>チサ</small>	205コウバイ	海鼠腸 <small>コノワタ</small> <small>(御逸事)</small>
130オサユ	湯 <small>(生源寺旧女官談話)</small>	167カラモノ	大 根 <small>(御逸事)</small>	206リョウリョウ	煎海鼠 <small>イリコ</small>
131サ サ	酒 <small>(御逸事)</small>	168ゴ ン	牛 蒡 <small>(同上)</small>	207タツクリ	鰻 <small>グマメ</small>
132オッコン	酒 <small>(高倉子爵談話)</small>	169オカボ	南 瓜	208ヤヤトト	縮緬雑魚 <small>チリメンザコ</small> <small>(高倉子爵談話)</small>
133クコン	同 上 <small>(御逸事)</small>	170ナ ス	茄 子	209ジャモ	同 上 <small>(同 上)</small>
134シロザサ	白酒 <small>(御湯殿の上の日記)</small>	171ネモジ	葱	210オナガ	長髪斗
135ネリクコン	同 上 <small>(御逸事)</small>	172ネブカ	同 上 <small>(御湯殿の上の日記)</small>	211オイタ	蒲 鉾 <small>(御逸事)</small>
136ネリオッコン	同 上 <small>(生源寺旧女官の談話)</small>	173ヒトモジ	同 上 <small>(御逸事)</small>	212オナマス	膾 <small>ナマス</small> <small>(生源寺旧女官談話)</small>
137天 野	天野酒 <small>(御湯殿の上の日記)</small>	174フタモジ	韭 <small>ニラ</small> <small>(同上)</small>	213オナマ	同 上 <small>(御逸事)</small>
138オキジ	雉 酒	175ニモジ	大 葱 <small>ニラ</small> <small>(大上臈御名之事)</small>	214オハマ	同 上 <small>(同上)</small>
139アマオッコン	甘酒 <small>(高倉子爵談話)</small>	176タ ケ	筍 <small>(御逸事)</small>	215クロオトリ	雁
140シロモノ	塩 <small>(同上)</small>	177タケノオバン	筍 飯	216シロオトリ	雉 <small>(御逸事)</small>
		178マ ツ	松 茸 <small>(御逸事)</small>		
		179マツノオバン	松茸飯		

尼門跡の言語生活からみた女房詞の研究 (I)

(丙) 身体に関するものの称呼

217 オツム	頭	224 御ミアセ	血(同上)	229 オムサムサ	軽 症(御逸事)
218 オグシ	髪	225 ア セ	血(高倉子爵談話)	230 オヨシヨシ	平 癒(生源寺旧女官談話)
219 シ シ	眉毛(大原伯爵談話)	226 オスル	発 熱(お 上)	231 オマケ	月 経
220 御ミクビ	首(生源寺旧女官談話)	227 歎 楽	御日出度き時に病 気せるをいふ。	232 マ ケ	同 上(御逸事)
221 クモジ	同上(御湯殿の 上の日記)	228 子細ノ所勞	表面上忌引出来ざ る時例へば生母或 は実子等の死せし 時に所勞引に称ふ る語	233 オトウ	大 便(高倉子爵談話)
222 オスソ	足(生源寺舊女官談話)			234 オチョウズ	小 便(小水)(同上)
223 オミヤ	同 上				

(丁) 衣服・品物に関する称呼

235 御 服	着物(お 上)	255 シタノモノ	男女襦袢	275 オケタ	剃 刀
236 オメシモノ	同 上(目 上)	256 イタノモノ	緞子・縞珍の類	276 オハグロ	鉄 漿(生源寺旧女官談話)
237 オメシ	同 上	257 ネモジ	練 絹	277 鳥 目	錢(高倉子爵談話)
238 メシモノ	同 上(目 下)	258 越 後	越後上布	278 御 宝	同 上(大原伯爵談話)
239 オジャウゾク	袍	259 オナカ	綿(高倉子爵談話)	279 ノモジ	糊
240 オヒトヘ	単	260 ヤハヤハ	同 上	280 ツクツク	月見の時用ふる白 (御逸事)
241 オミアハセ	袷	261 オトコ	寝 具(高倉子爵談話)	281 オヒツ	飯 櫃
242 オナカイレ	綿 入(生源寺旧女官談話)	262 オジョウ	同 上	282 シャモジ	杓 子
243 オデンチ	ちやんちやん	263 オシトネ	茵	283 シュンカン	深い茶碗(高倉子爵談話)
244 オモジ	帯(お上)(生源寺旧女官談話)	264 オシトネ	座布団(高倉子爵談話)	284 オカブト	深い皿
245 オミオビ	帯(宮様以下)	265 オスエ	末 広(御逸事)	285 オミハン	簪(生源寺談話)
246 オカカヘ	丸 紵(生源寺旧女官談話)	266 オセンス	扇	286 大 清	陛下の(御食品) 御品物(も含む)
247 シマカミ	縞社袴	267 メシモノ	履 物(生源寺旧女官談話)	287 清	御祭の御料
248 御サラン	かたびら(生源寺旧女官談話)	268 金 剛	草 履	288 「何」印	宮様方の御品
249 オユカタ	湯上り着(同上)	269 ナガサヲ	長 持	289 中 清	臣下の料
250 御カクシモノ	襦袢(お上)(同上)	270 オコタ	炬 燵	290 セキモリ	いかき(簀)(大原伯爵談話)
251 オヒヨ	同 上	271 オアカリ	燈火具	291 コボコボ	ぼっくり(女子用下 駄の一種) (大原伯爵談話)
252 ナガヒヨ	長襦袢	272 小 蓋	硯 蓋	292 ジンコ箱	塵 箱(同上)
253 オシタノモノ	襦 袢(目 上)	273 ミツアシ	三脚燭台	293 オアクキリ	灰 皿
254 オムツ	同 上(御逸事)	274 ケタル	剃 刀		

(戊) 動作及形容に関する称呼

294 行 幸	主上の御出行(遠近共)をいふ	303 オヒル	起 床(お 上)	312 メシアガル	飲食する
295 御 幸	上皇の御出行(遠近共)をいふ	304 オヒナル	起 床(高倉子爵談話)	313 メ ス	着る・人を呼ぶ
296 行 啓	后宮・東宮の御出行(遠近共)をいふ	305 出 御	宮中の或る殿にお 出ましのこと	314 アゲル	してあ(例 髪をあげる) げる(御召をあげる)
297 ギョシナル	就 床(お 上)	306 入 御	宮中の或る殿より 退出のこと	315 アソバス	すること
298 オスマル	同 上(同上)	307 クワンギヨ	親王関白の御帰還	316 シヤス	同 上(大原伯爵談話)
299 ミコシ	同 上(同上)	308 クモジ	還 御(御湯殿の 上の日記)	317 シヤツタ	した こと(目下) (大原伯爵談話)
300 ギョシン	同 上(宮 様)	309 カタヅク	嫁に行くこと (大原伯爵談話)	318 ナラジャル	入 来(目 上)
301 オシヅマル	同 上	310 オシツケ	試嘗・試饌	319 オイデニナル	同 上
302 オヒケ	同 上	311 御沙汰	仰 せ	320 マキル	来 る

# 人 文 学 報

321キヤッタ	来た(目下) <sup>(大原伯爵談話)</sup>	335オススギ	器物を洗ふこと	349キョウガル	驚く(同上)
322オヒロヒ	歩行 <sup>(高倉子爵談話)</sup>	336オスマシ	衣類等を洗ふこと	350ムツカル	泣く(同上)
323オワシヤッタ	居られた <sup>(大原伯爵談話)</sup>	337テウヅヲツカフ	洗 顔	351オイシイ	美味(同上)
324有ラシヤル	有ること(同上)	338オシマヒ	化 粧	352ムツカシイ	高価なること <sup>(大原伯爵談話)</sup>
325オナシ	抱くこと <sup>(生源寺旧女官談話)</sup>	339オクシアゲ	結 髪	353ヒタイ	低価なること(同上)
326オタタ	おんぶ	340オナデ	髪をなでつけること	354オメモジ	面 会
327スベス	物を撤下すること	341タレル	剃ること	355与 <sup>ヨ</sup> 達 <sup>ダツ</sup>	代理 <sup>(高倉子爵談話)</sup>
328オトギ	相手をする	342オタレガアガル	お剃りすること <sup>(生源寺旧女官談話)</sup>	356上ゲマシヤル	御上方よりの御献上
329ハヤス	食物を細かくきざむこと	343オミヨウガヒ	嗽 <sup>(お上)</sup>	357賜り物	拝領品 <sup>(大原伯爵談話)</sup>
330ナホス	食物を切ること	344オイトボイ	可愛い	358下サレ物	同上(同上)
331ワタス	漬物等を切ること	345イトボイ	同上 <sup>(高倉子爵談話)</sup>	359進ゼラル	贈 与 <sup>(御上方)</sup>
332ヒドル	物を焼くこと	346オイトシイ	気の毒	360オカハリ	代 価 <sup>(大原伯爵談話)</sup>
333シタタメル	煮ること	347オスルスル	無事に	361オスス	煤 払
334スマス	洗ふこと	348キョクンナコト	驚くこと <sup>(高倉子爵談話)</sup>		

## (ウ) 殿舎に関する称呼

362御 <sup>オ</sup> 清 <sup>キヨ</sup> 所 <sup>コロ</sup>	御料の御調理所	364オトウ	厠 <sup>(御逸事)</sup>	366閑 所	厠 御料 <sup>(高倉子爵談話)</sup>
363局 口	女官の出入口・女中の出入口	365御手洗 <sup>オチヨウズドリ</sup> 所	厠 御料 <sup>(生源寺旧女官談話)</sup>		

## (エ) 其 の 他 の 語

367オトシメシ	老人 <sup>(御逸事)</sup>	369オ ュ	浴	371寺下 <sup>テラ</sup> ゲ	次男以下の子供の死亡
368御徳日	悪 日	370オミヤ	土 産	372ヒトマス	一 升

以上の中註記なきものは河緒実英調査の資料を大原伯爵・正親町典侍・山口穂積旧女官談話により検討して定めたるものなり。

## 〔付〕 「宮 廷 秘 歌」の「秘められた女房ことば」 (§ 25-3)

この書は昭和25年3月刊、小森美千代さんの著で、その「秘められた女房ことば」の項に宮中女官のことば 103 語の多数が収められている。これは終戦直前まで大宮御所、少くとも竹屋女官長の局で語られていた女房詞をかって下女<sup>げめ</sup>として仕えていた著者が記したものである。所収語彙 103 語中、およそ60語は「公家言葉集存」所収の語と変りがない。また同書所掲の口上の一つに「だんなさまにも、おきげんようならっしやいまして、おめでとうよろこびます。」(これは下級女官が自分の仕えている女官長に対する口上)がある。

\*

\*

\*

以上示した女房詞記載文献によって、室町時代以降江戸時代末期に至るまでの女房詞使用の概要と、その語彙漸増の跡を辿ることができる。最も古い「蜚藻屑」(1420年)のようなごく簡明な記載から、足利義政時代の「大上臈御名之事」になると語彙数も増加し(約126語)、更に「女重宝記」(1692年、約144語)をはじめとする江戸時代中期の諸文献になると女房詞語彙の範囲が急に拡まっていることが分る。またこれとは別に田安宗武の「草むすび」のような異色のある女房詞批判書の出ていることも興味深い。これらの文献には、雅語・歌語や一般婦人語の混入した「女重宝記」系や「女中言葉」(1712年、503語)系のようなものもあれば、「日葡辞書」(1603年)

#### 尼門跡の言語生活からみた女房詞の研究（Ⅰ）

のように女性語を記載したものもあって、必しも狭義の女房詞だけの記載に限定されてはいない。これらの諸文献中、どの語が一般女性語や雅語・歌語の混入であるかを決定することは後述にゆずりたい。

また現存の尼門跡ことばや本書で紹介した新資料「公家言葉集存」（昭和19年，372語）の公家言葉や現在の宮中女官のことばと女房詞との関係も更に検討を要するが、尼門跡の言語生活において使用されている尼門跡ことばの実態を明らかにすることによって、これらの諸問題に何らかの解答を与えたいと思う。